

源俊頼ならびに金葉集時代の歌壇の研究

| | |
|---------|---|
| 著者 | 池田 富蔵 |
| 学位授与大学 | 東洋大学 |
| 取得学位 | 博士 |
| 学位の分野 | 文学 |
| 報告番号 | 乙第8号 |
| 学位授与年月日 | 1967-10-16 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1060/00004019/ |



第二編

歌人俊賴の研究

第一章 散木奇歌集論考

第一節 歌集名とその成立

白河法皇の院宣によつて勅撰集「金葉集」

を撰進したことは、俊頼にとつては屈期的な

編纂事業であつた。すでに齡七旬を越えた俊

頼に歌人としての不動の地位を与えたことは

いうまでもないが、俊頼にはまだ大きな仕事

が残っていた。金葉集時代の革新歌人として
各種の歌合に出席して提出した作品はもとよ
りであるが、その他彼の折々に詠みのこした
歌の数も相当な数になつていたがそれをまと
めた彼自身の家集をまだ持つていなかつたの
である。歌論書としてはすでに永久三年（61オ）
に「俊頼髓脳」を完成させているが、彼みず
からの歌集は多忙な身辺にあつて遂にまだ編
纂の余裕がなかつた。金葉集三奏本もようや
くなり、やつと自己の家集編纂のことを考え

企画実践に移す時が来た。かくして成立を
 みたのが「散木奇歌集」全十巻であつた。畧
 して「散木集」ともいう。
 さて、歌集名となつた「散木」については
 村上忠順の「散木奇譚集標註」に莊子から由
 来することとを述べている。即ち、
 「莊子云匠石之者至乎曲轅。見櫟社樹匠伯不顧
 遂行不輟。弟子厭觀之走。及匠石曰未嘗見
 材如^レ此其美也。先生不肯視行不輟。何耶曰
 已矣。勿^レ言^レ之散木也。是不材之本也。無^レ所

| | | | | | | | | | | | | |
|-----------|---|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 忠順はさうに「 | 北 | 辺 | 隨 | 筆 | 云 | 俊 | 頼 | 朝 | 臣 | の | 家 | 集 |
| れは奇にも通ずる。 | | | | | | | | | | | | |
| きことを褒めてい | る | の | で | あ | る | 。 | し | て | み | る | と | そ |
| 其美也。」と言つて | い | る | 如 | く | 、 | そ | の | 材 | の | 珍 | ら | し |
| ころが又一方、匠石 | の | 弟子 | は | 「 | 未 | 嘗 | 見 | 材 | 如 | 此 | | |
| 足らざる木のこ | と | を | 意 | 味 | す | る | も | の | で | あ | る | 。 |
| とある匠石の詞を | 引 | 用 | し | た | も | の | で | あ | り | 、 | 用 | に |
| た「散木」とは、「 | 是 | 不 | 材 | 之 | 本 | 也 | 。 | 無 | 所 | 可 | 用 | 」 |
| と註してゐる。 | こ | れ | に | よ | る | と | 、 | 家 | 集 | 名 | と | な |
| と註してゐる。 | こ | れ | に | よ | る | と | 、 | 家 | 集 | 名 | と | な |
| た「散木」とは、「 | 是 | 不 | 材 | 之 | 本 | 也 | 。 | 無 | 所 | 可 | 用 | 」 |
| とある匠石の詞を | 引 | 用 | し | た | も | の | で | あ | り | 、 | 用 | に |
| 足らざる木のこ | と | を | 意 | 味 | す | る | も | の | で | あ | る | 。 |
| ころが又一方、匠石 | の | 弟子 | は | 「 | 未 | 嘗 | 見 | 材 | 如 | 此 | | |
| 其美也。」と言つて | い | る | 如 | く | 、 | そ | の | 材 | の | 珍 | ら | し |
| きことを褒めてい | る | の | で | あ | る | 。 | し | て | み | る | と | そ |
| れは奇にも通ずる。 | | | | | | | | | | | | |

を散木奇歌集と名づけられたり。此散木とは、
 無用なる木の事也。莊子にみえたり。これに
 よりて謙遜して名づけられし也。いはゆる散
 位散人などみなこの心也。とこれをまとめて

自己の解釈を施してゐるのである。

次に、本家集の書名は大部分は「散木奇歌

集」とあるが、一方には「散木奇歌集」(小

沢本は「散木奇歌集」とある。とある本が、あ

る。「奇」を採用したのは、契沖・岡本保孝

・村上忠順を始め近代では西下経一・岡田希

| | | | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|-----|---|---|----|---|---|----|---|---|---|---|---|
| い | か。 | 「 | 金葉集 | し | と | 名づ | け | た | 俊頼 | の | 命 | 名 | 法 | の |
| 俊頼 | の | 志 | 向 | す | る | 新 | 奇 | が | 含 | ま | れ | て | い | る |
| 残 | る | の | で | あ | る | 。 | あ | し | ろ | 「 | 奇 | し | と | す |
| る | の | で | あ | る | 。 | あ | し | ろ | 「 | 奇 | し | と | す | る |
| と | が | 俊頼 | の | 本 | 旨 | で | あ | つ | た | か | ど | う | か | は |
| こ | と | が | 俊頼 | の | 本 | 旨 | で | あ | つ | た | か | ど | う | か |
| 如 | く | 果 | た | し | て | 謙 | 遜 | の | 意 | 味 | に | 「 | 弁 | し |
| い | て | は | す | で | に | 関 | 根 | 慶 | 子 | 博 | 士 | も | 論 | 究 |
| 人 | 達 | の | 一 | 致 | し | た | 解 | 釈 | で | あ | つ | た | 。 | こ |
| 讓 | の | 意 | に | と | つ | て | い | る | の | が | こ | の | 字 | を |
| れ | る | 通 | り | 「 | 弁 | し | も | た | た | 散 | 木 | と | 同 | じ |
| 雄 | 等 | で | あ | る | 。 | 村 | 上 | 忠 | 順 | の | 先 | 述 | し | た |
| 解 | の | 意 | に | と | つ | て | い | る | の | が | こ | の | 字 | を |
| 讓 | の | 意 | に | と | つ | て | い | る | の | が | こ | の | 字 | を |
| 人 | 達 | の | 一 | 致 | し | た | 解 | 釈 | で | あ | つ | た | 。 | こ |
| い | て | は | す | で | に | 関 | 根 | 慶 | 子 | 博 | 士 | も | 論 | 究 |
| 如 | く | 果 | た | し | て | 謙 | 遜 | の | 意 | 味 | に | 「 | 弁 | し |
| こ | と | が | 俊頼 | の | 本 | 旨 | で | あ | つ | た | か | ど | う | か |
| 残 | る | の | で | あ | る | 。 | あ | し | ろ | 「 | 奇 | し | と | す |
| 俊頼 | の | 志 | 向 | す | る | 新 | 奇 | が | 含 | ま | れ | て | い | る |
| い | か。 | 「 | 金葉集 | し | と | 名づ | け | た | 俊頼 | の | 命 | 名 | 法 | の |

（注・「散木奇歌集の研究と校本」32頁）

意識の底には俊頼の自負心があつたと思われ
るし、それと同様に自己の歌集の命名には尚
更ら、自負心をこめた誇りを以て臨んだと解
釈してもよいのではないか。人間的に謙讓深
い俊頼であつたことは歌合の判詞などからも
容易に推測はされるが、歌人としての俊頼に
は自信に満ちた力を自負していたと思われる
。そういう意味から「散木」にしても「奇」にしても
ただ消極的に「無用にして棄て去る歌」と解
するよりも、もつと前向きの姿勢で、「有用に

して且つ新奇な歌^レという誇りを以て彼自身の
作品の特異性を誇示したものと解したいので
ある。諸本の系統の面から「散本奇歌集^レ」
とする南根慶子説に筆者も従いたい。

散本集の編述はその特異な名称の附け方か
らみておそらく俊頼自身がつけたものである
う。若し他人の編になつたものとしたならば
たとえば「源俊頼家集^レ」という如き極めて平
凡な名になつたに違いない。

散木集の成立については、確かな資料とな
 るべきものは見出だせないが、金葉集二度本
 雑下の最尾に「年七十になるまでつかさとな
 くよろづにあゆしきことを思ひつけけてよめ
 る」として
 〇なくそぢにみちぬるしほの染ひさぎ久しく
 も世にむもれぬるかな
 の一首がある。なお、この歌は散木集の雑九
 には「金葉集の奥に御覧じあはれべとおぼし
 くて書きつけ侍りける」と詞書を改めて載せ

ている。但し三奏本にはこの歌はないのだから少なくとも二度本撰述以後に於て散本集は成立している。とみてよい。しかし、一方に於ては「金葉集」の編集に尽力している俊頼であるからこの間に膨大な家集が完成したとは考えられない。自家集をまとめた希望と構想は、むしろ持つていたに違いないが、その成立は三奏本の撰進を完了した大治二年（73才）以後没年大治四年の間に成立したものである。う。俊頼の没年については「中右記」大治四

年十二月一日の條に

「天晴、御八講有堅義、山階寺堅教縁、故俊頼孫云々」

という記事があるので十二月一日以前にはすでに物故してゐることが知られる。

教縁は、尊卑令脈によると、

俊頼

俊重

頼經

教縁

とあり、俊頼の子俊重の二男であり、後に大

僧正（興福寺別当）になつた人である。「永縁

奈良房歌合」に於ける教縁の歌はすべて俊頼

が代作をしている。俊頼七十一才の時、金葉集二度本を奏上したのも同じ年で天治二年のことである。翌大治元年には俊頼最後の「摂政左大臣家（忠通）歌合」に判者、作者として出席。金葉集三奏本もこの年か翌二年には奏覧の運びになっており、かなり多忙な俊頼の最晩期であった。「史料綜覧」・「読史備考」（忌日索引）には俊頼没を大治四年十一月としている。これは先述の「中右記」の十二月一日の記事が根拠となっていているらしく

おそろく大治三年にその成立をみて翌四年には自分の手であんだ散木集をみてこの年七十五才の生涯を閉じたものと思われる。

さて、散木集の内容十卷は整然とした部立

組織を十部に分かつている。ことに勅撰集に

ならいつりも四季の各部を更に三ヶ月に区切つ

て細分しているところに特色がある。即ち、

第一 春部 正月・二月・三月

第二 夏部 四月・五月・六月

第三

秋
部

七月
·
八月
·
九月

茅
四

冬部

十月
十一月
十二月

芳
五

祝
部

別離

旅宿（羈旅）

第六

悲
歎
部

神祇

耕
教
部

第七

恋部上

茅
八

恋
部
下

芳
九

雜
部

第十

雜部

長款
·
旋頭款
·
混本款
·
折

句歌
·
沓冠折句歌
·
隱題
·

連歌

という部立組織である。

ここでも部立上の肉題点を考えてみると、第

五における別離と旅宿は勅撰集では「離別」

（散木集では「別離」と逆になつており、旅

宿は普通「羈旅」とあるべきである。）

この事については南根博士がすでにふれて

いる様に寫本でも本文価値の少ない神宮文庫

本（乙本）、小沢本、岸本文は凡て「羈旅部」

とある。一般の他の歌集の部立名も大抵この

「羈旅」の名を用いてゐるのに散木集の現存

写本では「旅宿^L」としていているのが多いところ
 から原本としてはこの新しい名の「旅宿^L」を俊
 頼も用いたのではないだろうか。この事は例
 えば他の部立名の場合でも言える。即ち、従
 来多くは「賀^L」であるべきところを俊頼は「
 祝^L」を用いている如きである。第六に於ても普
 通は「哀傷^L」を用いているのを「悲歎部^L」と
 従来にみられない新しい命名法を用いている
 如きもそうである。また、雑部を上・下に分
 けて下の方に長歌以下歌体別に六種に分ち、

| | | | | | | | | | |
|--|--|--|--|--|---|--|---|------------------|---|
| さ ら に 「 連 歌 」 を こ こ に 配 置 さ せ た こ と は 他 | の 家 集 に 見 ら れ な い 散 木 集 独 特 の 編 集 方 針 と | い う べ き で あ る 。 但 し 、 散 木 集 の 諸 本 間 に お | い て は 細 部 に 異 同 が あ る 。 そ れ を 次 に 示 す と | (1)、 間 宮 本 に 校 し て い る イ 本 の み に 「 別 離 」 | に 「 之 部 」 を 附 す 。 | (2)、 神 宮 文 庫 本 （乙 本） ・ 小 沢 蘆 庵 本 ・ 岸 本 | 由 豆 流 本 の 三 本 の み 「 神 祇 」 に 「 部 」 | を 附 す 。 | (3)、 (2) の 三 本 と 、 刊 本 に の み 「 釈 教 」 に 「 部 」 |
|--|--|--|--|--|---|--|---|------------------|---|

| | | | | | | | | | |
|------------------------|-------------|-----------------------|-------------------------|----------------------------|----------------------------------|------------------------|---------------------|----------------------|------|
| かく考えてくるとこれら「部」・「之部」は後人 | 対してあるのが正しい。 | 以外には存しているの。でこれは「雑部下」に | (4) に於ける「雑部」について「上」が類従本 | (2) ・ (3) に於ける「部」は粗本のみにある。 | 部 _L は現存本の中には附したものはない。 | ということになる。以上の中(1)における「之 | 附していない。(「雑部下」は諸本一致) | (4) 類従本に於ては「雑部」に「上」を | を附す。 |
|------------------------|-------------|-----------------------|-------------------------|----------------------------|----------------------------------|------------------------|---------------------|----------------------|------|

が附したものであることがわかり、これらを
 除きすることにより純粋な俊頼自身のたてた
 部立名の構想が出来あがる。すなわち、各卷
 の初卷のみに「部」がつくという極めて整然
 たる部立になるのである。
 以上、俊頼の散木集編纂に當つての外形的
 構想の部立構造について述べてきたが、俊頼
 は勅撰集の規範に依據しつゝもこれを自家集
 十卷の中に圧縮して彼自身の考えに基づいて
 編纂したのである。次ににはさらに進みその内

部の具体的編纂の部立意識について考えてゆ
きたい。

第二節 散木集編纂の部立意識

散木集の總歌数 1619 首（重出歌三首を除く。）
の膨大な数をもつ歌集を編纂するに当たつて
いかなる部立をたて、作品を配直するかといふ
ことは、歌人俊賴の撰歌意識の統一といふこ
とにっなる問題である。

部立構成の意識はすでに「古今集」に勅撰
 集としての規範が示されている。まず、四季
 から始まり種々歌の詠まれる対象の雑多な変
 化に伴ないその部立を決めてゆくという方法
 である。四季に対する人間の感覚は季節の推
 移により漸次時間的に展開されてゆく。この
 ことはひとり歌人のみならず、物語、随筆、
 日記の作者たちも等しく持つていたもので、
 その端的な表現は枕草子が四季の叙述から始
 まり、さらに各季のもつ行事などの細叙に発

展してゆくことによくうかがえるのである。

このような四季折々に對する美的感覺は毎

年くり返される日本風土の特色に對する民族

の生活感情でもあつた。

こうした生活感情が叙情詩たる和歌の世界

と結びつき、それが歌集編纂の部立として定

着していつたことは當然な帰結であつた。こ

の事を俊賴は「俊賴髓」の中に「歌の題」

のこゝと關係させて「大方歌をよまむには題

をよく心得べきなり」から始まり、詳細にそ

の例をあげて叙している。

「例へば、春のあしたにいつしかとよまむ

と思はば、佐保の山に霞の衣をかけつれば

、春の風にふきほころばせ、峯のこずゑを

へだてつれば、心やりてあくがらせ、梅の

にほひにつけて、鶯をさそひ、子日の松につ

けても心のひくかたならばちとせをすごさ

む事を思ひ、若菜をかたみにつみためても

心ざしの程をみえ、残りの雪の消えうせぬ

るに、我身のはかなき事をなげき……しと

これは春の景物を題として詠むべきことを示したものでまだ次々に春の主題についてのは長々とつづく。以下俊頼は四季折々の景物、さらにその景物についての抒情の在り方にも及んでいるのである。この考えはその弟子俊成の「古来風体抄」の中にも継承された。俊頼髓脳¹に述べられた景物主題はそのまゝ俊頼の散木集²編纂の上に実は具体化されていゝることを忘れてはならない。今、散木集の主題を抜き出してみると次の如くなる。

| | | | | | | | |
|---------------------|--------------------|---------------------|--------------------|---------------------|--------------------|-----------------------|------------------|
| (1) 春の主題 (正月・二月・三月) | | (2) 夏の主題 (四月・五月・六月) | | (3) 秋の主題 (七月・八月・九月) | | (4) 冬の主題 (十月・十一月・十二月) | |
| 正月 | 元日・立春・霞・子の日・若菜・卯杖・ | 四月 | 衣がへ・卯花・あふひ・橘・郭公・ | 七月 | 七夕・夕立・夕顔・夕霧・夕立・ | 十月 | 霜・霜降・霜降・霜降・霜降・ |
| 二月 | 青馬・残雪・鶯・梅・柳・その他・ | 五月 | 郭公・蛙・早苗・あやめ・五月雨・蚕・ | 八月 | 月見・月見・月見・月見・月見・ | 十一月 | 初雪・初雪・初雪・初雪・初雪・ |
| 三月 | 櫻・帰雁・春駒・すみれ・かきつばた・ | 六月 | ともし (照射)・その他・ | 九月 | 苗代・雉子・款冬・藤花・山なしの花・ | 十二月 | 三日月・晦日・早蕨・桃・その他・ |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------|----|----|-----------------------|--------|------|--------|-----|----|------|-----|-------|---------------------|----|----|----|----|---|
| 十・十一・十二月 | | | (4) 冬の主題 (十月・十一月・十二月) | | | 九月 | | | 七・八月 | | | (3) 秋の主題 (七月・八月・九月) | | | 六月 | | |
| 氷 | 時雨 | 紅葉 | 月・菊・紅葉 | 雁・露・掛衣 | 薄・藤袴 | 立秋・風・萩 | 蚊遣火 | 水風 | 水鳥 | 紅葉 | きりぎりす | 夕顔 | 夏風 | 夏日 | 夏虫 | 撫子 | 風 |
| すみがま | 網代 | 鷹狩 | 秋の夕暮 | 虫の音 | 鹿・霧 | 七夕 | 水鶏 | 夏日 | 千鳥 | 九月尽 | 野・刈萱 | 夕顔 | 夏虫 | 撫子 | 風 | 撫子 | 蟬 |
| 歳暮 | 雪 | 蘆 | その他 | その他 | 山田 | 女郎花 | 夕顔 | 風 | その他 | その他 | その他 | 九月 | 風 | 撫子 | 風 | 撫子 | 蟬 |

以上のような自然の景物は四季推移に伴な
う詠歌の重要な主題を形成する。

散木集に於て四季を十二等分に月割し、さ
らにこれを四等分に春夏秋冬に区分している

方法は「相模集」^Lや「曾根好忠家集」^L（曾丹集）

などにその例が見えてゐる。その一覽表を示
すと次の通り。

| 家 月集 別 | | | | | | | |
|--------------|----------|----------|------------|---------|------|----------|------|
| 正月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 |
| 始めの春 | 仲春 | はての春 | 夏の始め | 中夏 | はての夏 | はつ秋 | なかの秋 |
| 相模集 | | | | | | | |
| 春のはじめ | 中の春(二月初) | 暮の春(三月初) | 夏(序歌)(四月初) | 夏中(五月初) | 六月初 | 秋(序歌)初の秋 | 八月上 |
| 正月中 | 二月中 | 三月中 | 四月中 | 五月中 | 六月中 | 七月中 | 八月中 |
| 正月終 | 二月終 | 三月終 | 四月終 | 五月はて | 六月終 | 七月終 | 八月終 |
| 曾祢好忠集(毎月集) | | | | | | | |

| | | | | | | | | | |
|------------------------|--------|--------------------------|-----------------------|-----------------------|--|-----------|----------|--|--------|
| 「好忠集」は十二ヶ月に分けた上、さらに一ヶ月 | 考えている。 | はじめ・「なか」・「はて」の三等分にし季の推移を | 十二ヶ月を四季にわけ、さらにその一區分を「 | 以上兩集の分け方をみると、「相模集」の方は | | 十二月はての冬 | 十一月なかの冬 | 十月冬のはじめ | 九月はての秋 |
| | | | | | | 暮の冬(十二月初) | 中の冬(十月上) | 冬 <small>(序歌アリ)</small> のはじめ <small>(十月)</small> | 九月上 |
| | | | | | | 十二月中 | 十一月中 | 十月中 | 九月中 |
| | | | | | | 十二月終 | 十一月終 | 十月はて | 九月終 |

月を「初（上）」。「中」。「終（はて）」に細分し、各部分に十首の歌を配していろのみでなく四季の巻頭にはいずれも長歌（反歌一首あり）があるという風に整然とした構成をなしている。俊頼はこの兩集の如く細分はしていないが一年を四季別に四等分（三ヶ月を一つの季の単位とする方法。）にする考えは同じであり、俊頼の意識の底にはやはり好忠や相模の如く四季の推移の中に細分した景物を歌の主題として把握する方法をとったのである。

| | | | | 部 | 月 |
|-------------|-------------|----------------|---------------|--------|---|
| 春 | | | | | |
| 霞 | 鏡 | 立 | 元 | 正 | |
| | | 春 | 日 | 月 | |
| 14 | 3 | 1 | 1 | 歌 | 数 |
| 散 る 櫻 | 咲 く 櫻 | 咲き そめる 櫻 | 咲か ざる 櫻 | 二 月 | |
| 28 | 50 | 1 | 1 | 歌 | 数 |
| 早 蕨 | 帰 雁 | 桃 の 花 | 三月三日の心 | 三 月 | |
| 1 | 3 | 1 | 3 | 歌 | 数 |

様
な
表
が
出
来
あ
が
る。
 数
の
多
寡
な
ど
と
比
較
し
つ
つ
考
え
て
ゆ
く
と
次
の
 よ
う
に
具
体
的
に
排
列
さ
れ
て
い
る
か。
こ
れ
を
歌
 次
に
「
散
本
集
し
に
お
け
る
四
季
の
主
題
が
ど
の

| | | | | | | | | | |
|---|----|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 部 | | | | | |
| 柳 | 梅 | 鶯 | 余 | 春 | 粥 | 駒 | 卯 | 若 | 子 |
| | | | 寒 | 雪 | | | 杖 | 菜 | の |
| | | | | | | | | | 日 |
| 3 | 10 | 9 | 1 | 3 | 1 | 1 | 3 | 5 | 5 |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| 三 | 残 | 山 | 藤 | 山 | 雉 | 苗 | か | す | 春 |
| 月 | | 梨 | の | | | | き | み | |
| 尽 | 櫻 | の | 花 | 吹 | 子 | 代 | つ | れ | 駒 |
| | | 花 | | | | | ば | | |
| | | | | | | | た | | |
| 8 | 1 | 1 | 7 | 9 | 3 | 1 | 1 | 2 | 3 |

| 夏 | | | | | | | 部 | 月 | 主 題 |
|------------------|------------------|--------------------------------|-----------------|------------|------------------|------------------|---|------------|--------|
| | 郭 | 橘 | 葵 | 卯 | 餘 | 更 | | 四 | |
| | 公 | | | 花 | 花 | 衣 | | 月 | 14 |
| | 5 | 2 | 2 | 12 | 3 | 1 | 歌 | 数 | 60 |
| 螢 | 五 月 雨 | あ や め 五 五 日 | 脛 ^{はざ} | 早 苗 | 蛙 | 郭 | | 五 | |
| | | | | | | 公 | | 月 | 4 |
| 4 | 9 | 9 | 1 | 4 | 2 | 56 | 歌 | 数 | 80 |
| 竹 風 如 秋 | 晚 風 如 秋 | 撫 子 | 夏 虫 | 夏 月 | 夏 日 越 南 | 水 風 晚 涼 | | 六 月 | |
| 1 | 1 | 4 | 1 | 7 | 1 | 1 | 歌 | 数 | 44 |

部

照と
も
射し

2

秋

夕

水く

蚊

夕

蟬

風

氷

泉

避

節

顔

鶏な

遣火

立

室

暑

1

1

5

4

2

3

2

3

6

1

| 主 題 | 部 | | | | | | | | |
|--------|-------------|--------|--------|--------|--------|---|------------------|--------|--------|
| 6 | 夏 | | | | | | | | |
| 25 | | | | | | | | | |
| 8 | | | | | | | | | |
| 87 | | | | | | | | | |
| 26 | 六 月 被 | 葦 廬 | 木 蔭 | 夏 風 | 蓮 花 | 螢 | 水 風 如 秋 | 鵲 川 | 夏 草 |
| 58 | 2 | 1 | 1 | 1 | 2 | 1 | 1 | 4 | 1 |

| 秋 | | | | | | | | 部 | 月 |
|-----|-------|----|-----|------|------|---|----|---|---|
| | | 七 | 萩 | 残 | 晩風告秋 | 夕 | 立 | 七 | |
| | | 夕 | | 暑 | | 風 | 秋 | 月 | |
| | | 12 | 3 | 1 | 2 | 1 | 1 | 歌 | 数 |
| 蘭 | 鬼のしこ草 | 薄 | 萩 | 女郎花 | 露 | 刈 | 野 | 八 | |
| | | | | | | 萱 | 花 | 月 | |
| 2 | 1 | 5 | 10 | 7 | 1 | 2 | 3 | 歌 | 数 |
| 女郎花 | きりぎりす | 紅葉 | 柿の実 | 秋の夜長 | 秋の夕暮 | 菊 | 月 | 九 | |
| | | | | | | | | 月 | |
| 1 | 1 | 9 | 1 | 1 | 1 | 9 | 37 | 歌 | 数 |

| | | | | | | | | |
|--------|----|------------------|--------|--------|--------|--------|---|---|
| 主 題 | 部 | | | | | | | 秋 |
| 6 | | | | | | | | |
| 20 | | | | | | | | |
| 25 | 月 | 夕 づ く 夜 | 夕 風 | 山 田 | 持 衣 | 駒 迎 | 霧 | |
| 111 | 24 | 1 | 1 | 4 | 3 | 3 | 8 | |
| 11 | | | | | | | | |
| 65 | | | | | | | | |

| 冬 | | | | | | | | 部 | 月 |
|-----|---|------|-------|-----|------|-----|------|-----|---|
| | 網 | ひづち | 嵐 | 落 | 紅 | 時 | 初 | 十月 | |
| | 代 | 田 | | 葉 | 葉 | 雨 | 冬 | | |
| | 6 | 1 | 2 | 14 | 5 | 11 | 1 | 歌 | 数 |
| 臨時祭 | 神 | 五 | 蘆(蘆火) | 千 | 野徑寒草 | 鷹 | 山里住み | 十一月 | |
| | 祭 | 節 | | 鳥 | | 狩 | | | |
| 1 | 1 | 1 | 2 | 5 | 1 | 7 | 1 | 歌 | 数 |
| 衾 | 月 | 日光映水 | 水 | みぞれ | 霰 | 山家風 | 埋 | 十二月 | |
| | | | 鳥 | れ | | 風 | 火 | | |
| 1 | 3 | 1 | 4 | 1 | 2 | 1 | 1 | 歌 | 数 |

| 部 | 春の部 | 夏の部 | 秋の部 | 冬の部 | 計 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|
| 主題 | 三十二 | 四十 | 四十二 | 二十八 | 百四十二 |
| 歌数 | 184 首 | 170 首 | 196 首 | 113 首 | 663 首 |

る。

配列された歌数を整理してみると次の様にな

以上の表から四季の主題（景物）とそれに

この表で明らかなる様に主題・歌数ともに最も多いのは秋の部である。これは四季の中で秋という季節が主題になる景物を最も多く有して、いることを物語るものである。さらにその主題の内容をみると秋では「月」の主題に対する歌数が61首で最も多い。月の主題は八月の最後と九月の最初に連続的にまたがって配置する編集によつたためと景物そのものから言つても歌の対象に最もなりやすいためによるものである。（月の歌数は八月24首・九月37

首収録) 次が鹿(17首)・七夕(12首)・萩(10首)の

順である。以下畧。

その次に歌数の多いのは「春の部」の184首である。その内容を見てみると、正月と三月の主

題が全く同じの十四。ところが二月の主題は

櫻のみである。正しくは景物は一つであるが

この櫻を(1)咲かざる櫻(1首)。(2)咲きそめる櫻

(1首)。(3)咲く櫻(50首)。(4)散る櫻(28首)と

いう如く時間の推移によつて同じ櫻を四つの

主題に配置した編集方針をとつているのは俊

頼の巧みな主題に対する構成手法といふべきである。

「夏の部」の主題景物は「春の部」より多く四十を数えるがその歌数は170首で少ない。夏の主題

で歌数の最も多いのは「郭公」の61首。（これ

も四月の最後（5首）と五月の最初（56首）

に連続的にまたがって配置している。）次が「卯

花」の12首。その他は凡て十首以下で一主題に対

して一首と云うのがかなり多い。つまり、主

題は多いがそれを詠んだ歌が少ないというの

が「夏の部」の特色である。

「冬の部」の主題は二十八で歌数が113首。四

季のうちで主題も歌数も最も少ない。主題の

うちわけは十二月（十三）・十一月（八）・十月

（七）の順で歌数から云えば同じく十二月の

54首が最も多く次が十月の40首で十一月の19

首が最も少ない。十二月の歌数の多いのは冬

の主題景物として「雪」23首があつたためで十月

が主題の少ないのに十一月よりも歌数の多か

つたのは、「時雨」（11首）、「落葉」（14首）とい

季節の景物歌が多かつたためである。十一月
の主題歌の数の多かつたのは「鷹狩」7首で、
多いと云つても遂に10首を超えるに至らず千
鳥^ルの歌が5首ぐらいのもので他はいずれも一
主題に対し二首、一首と、いうことで全体の歌
数が伸びなかつたためであつた。

以上四季の部の歌についてその主題と歌数
の配列関係の実態をみてきた。そこには俊頼
のゆき屈いた緻密な編集ぶりが窺われる。勅
撰集たる金葉集より自由な主題配列が試みら

れて
いて
る
のも
私家集「
散木奇歌集」の
特色であ
った。

第三節 散木集の伝本考

散木集の諸本については、岡根慶子博士の「散木奇歌集の研究と校本」^L（昭和廿七年・明治図書出版株式会社刊）の中にその勝れた論考を発表している。

この第三節に於ては同氏の学思をうけつゝ、なお筆者自身もそれをたしかめ、新たな資料も加えて以下整理してみたいと思う。

散木集の伝本について現在知られてゐるも

のは刊本三本、寫本三十本以上ある。次にこ

れらの性質を検討してみよう。

(一) 刊本

(1) 群書類従本（十巻本）散木奇歌集

この奥書には「右散木奇謡集以織部正乗尹

本校合了」とある。但し織部本は現在みあた

らないので如何なるものか不明。原本も判明

しない。本書は類従本として一般に流布した
ものであるが、字句の誤脱などが多く他の本
を以て補うべきところが多い。

(2) 校註国歌大系本（十卷本）「散木奇歌集」

その例言に「竹柏園蔵佐々木弘綱翁稿本（藤
尾景年・伴林光中書入）を底本とし、顯昭法橋
の散木集注を参照」とあり、奥書は類従本と
全く同じである。ここにいう「竹柏園蔵散木

奇歌集^Lは十卷三冊本で、佐々木弘綱公卿の書寫
 にかゝるものであり、翁が「標注散木奇歌集
 俚言解^L」の著述に志した時にその本文を類従
 本で書寫したものの。従つて本文は脱落など全
 く類従本と一致している。かゝる意味から国
 歌大系本は類従本から發していることになる
 のである。

(3)

散木奇歌集標注（十卷四冊本）

（内閣文庫所蔵）

本書は村上忠順（刈谷藩主土井氏の藩医・国学者・文化九年（1812）—明治十七年（1884）・73才没）が散木集の考證と詞の心を注解するため執筆したもので序によると「嘉永三年庚戌正月」とある。はたしてこの記載通りに成立を考えて良いかどうかについては実は問題がある。というのは筆者が俊頼肉係の調査に刈谷図書館の村上文庫を訪れた際全文庫所蔵に寫本「散木弁歌集」二本（三冊本と四冊本）があり、三冊本の方には同じく序があり、この序

を刊本の序と比較してみるとかなり相違して
 いる。この三冊本の序は初稿であつて、それ
 が刊本の序になるまでにはかなり訂正された
 ものと思われる。たまたま筆者の研究調査の
 途中、築瀬一雄氏が『散本并致集標註』の成
 立なる論文を発表され、（『国語と国文学』氏
 昭和四十年八月号）の精緻な論考に接し大いに裨益される学恩に
 浴することを得た。要は本書の成立が従来考
 えられていた刊本の序の年記嘉永三年度戊（1850）より
 十年後の万延元年（1860）仲春以降と認められる資

料の存しているという事実が明らかにされた
のである。すなわち、村上家所蔵の「蓬廬裸
鈔」(蓬廬とは忠順の号)に収められている「
散木弁歌集標註序」が二通あり、いずれも忠
順が散木集研究について松本奎堂(刈谷藩の
志士)にその批正を求めたために書いた序であ
り、しかもこの執筆は再度にわたり奎堂に送
つている。第一回目の稿に対して奎堂は朱筆
を入れ或は削除し、或は補訂し、評言まで加
えて返送しており、この時の奎堂の年記には

「己未孟秋松本衡安批」とある。これは安政

六年(1859)にあたる。これを受け取った忠順は奎

堂の批正の場所を再考したとは思われるが必ず

しも全部そのまゝは入れず「伏乞周顧、忠順」

として淨書し、奎堂に再送した。

その一部を示す。(上段が忠順の初稿、下段

は奎堂の訂正箇所)

| | | |
|-----|-----|----|
| 信卿 | 源俊頼 | 忠順 |
| 之子也 | 朝臣 | |
| | 是 | |
| | 大納言 | |
| | 経 | |
| 卿 | 是 | 奎堂 |
| を削る | を削る | |
| 2 | 1 | 号番 |

| | | | | | | | | | | |
|--|---|--|----|---|---|---|---|---|---|---|
| の で あ る。 こ の 外 欄 外 に 例 え ば 7 の 個 所 に は | 以 上 の 形 で 奎 堂 は 加 筆 し 訂 正 を 試 み て い る | <div> <div> [○]卿[×] 有[○] 所 謂 能 乘 三 舟 之 材 </div> <div> [×]夫[×] 朝 臣 </div> <div> [×]故[○] 有 称 須 互 …… </div> <div> [×]其 自 家 詠[○] 調[×] 亦 高 邁 </div> <div> [×]而 撰 之 最 精 者 也[×] </div> <div> [○]築 集 者[×] 然[×] </div> <div> [○]雖 当 時 或 有 貶 議 而 名 肱[○] </div> <div> [×]白 河 院[×] 天 皇 </div> </div> <div> <div> [△]院[△] を 削 る </div> <div> [△]○印の個所に固属を補入 </div> <div> [△]○印の個所に之を補入。者然を削る </div> <div> [△]也[△] を 削 る </div> <div> [△]其 自 所 詠[△] と 訂 正 </div> <div> [△]○印に我邦古を補入 </div> <div> [△]夫[△] を 削 る </div> <div> [△]卿[△] を 削 り ○印に納言とする </div> </div> | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 |
|--|---|--|----|---|---|---|---|---|---|---|

「自家俚語不宜用之雅文^し」と訂正した理由の
 評語を記入している。この評語はそのほか五
 例ある。また奎堂の訂正は全部で23個所の多
 きに及んでいるがこの中忠順は8個所ほど指
 示通りにほうけ入れていない所がある。かく
 して訂正した初稿の出来上ったのが安政六年
 ということになり、忠順が再度の批正を奎堂
 に依頼し、奎堂また再訂し忠順の許に返送さ
 れたのが「庚申仲春辱知松本衡妄言^し」とある
 通り、万延元年二月のことであつた。この時

奎堂の再訂は七個所ほどあり、これらを淨書したのが刊本の序となつたものである。刊本の序の年記に「嘉永三月庚戌正月」とあるのは三冊本散木集に附された序の第一稿の案文作成の頃を指すのであり、以上述べてきた過程を経て實際「散木奇致集」標註しの完成したのは万延元年のことであつた。しかし、年記の「嘉永三月庚戌正月」は、第一稿の案文作成の頃のまゝに残されていたといふことになつてゐる。

本書は「第一章・第一節」にも述べた如く
 散木集という命名の由来なども詳しく、顕昭
 の「散木集」が作品の抜粋解説であるに対し
 全歌の解釈考証という画期的な散木集の研究
 書であつた。忠順が散木弁歌集研究に志した
 のをかりに天保十二年(1841)「散木弁歌集」四冊本
 の奥書による」とすればその完成まで十八年
 間という長い年月を経ており、この間忠順は
 宮々として専心郷里参河国(碧海郡高岡町大
 字堤)に在つて散木集研究に従事していたの

である。

以上「散本弁歌集標註」の成立をめぐる内

題につき述べてきた。この事は伝本研究その

ものの内題ではないが忠順の散本集研究につ

いては極めて大切なことでここで一応考える

べき要性をお願い述べた次第である。

次に本論に立ち帰ってそれでは忠順は散本

集の研究に当たってどのような本文を用いて

いたであらうか。この事については同じく「散

本弁歌集標註」刊本の「序及び」
於お富ふ無む泥ね」(本

書成立の大要を説明した文」と題するものが
中に述べている。まず序の方をみると、

「夫朝臣集亦然。而世間所伝寫本誤脱極多。不
可識読。頃日幸獲一本。雖非無謬誤。較諸他

本爲愈。於是取其歌載在撰集及諸書者校讐

之以録異同。――（第一丁裏から第二丁表の箇所）

という文がある。ここで忠順は世間流布の寫

本には誤脱の多いことを指摘している。幸い

にして手に入れた一本も謬誤あり他の諸本と

校合異同を録したという本文校訂の事にもふ

愈於是取其歌載在撰集及諸書者校讐之以錄異
 同抑此集雖近來翫之者尠矣古既有法橋顯昭奉
 梁門教命作之註又袖中鈔載數首釋之且京極中
 納言密勣亦甚賞譽之由此觀之當時珍賞超於它
 集必矣朝臣與法橋世之相去不遠然而梁門有教
 註之者不特以其什之佳且貴其能據用古語也余
 今尋法橋微意爲之標註其不足者加以諸家說補
 以僻案號曰散木奇歌集標註集中之歌有雄偉焉
 有新奇焉清詞妙句縱橫跌宕無所拘泥實可謂歌
 僊耳後世奇歌誤作奇歌亦宜矣後之觀者或據書

散木奇歌集標註序 (第一卷) (其の一)
 (内関文庫所蔵)

れてゐる。但しその入手の一本が何本であつたかという事についてほ別に語つてはいない。次に「於富無泥」をみると左の如き文がある。

「おのれこの集を校へ正さむの心はあらざりしかどもゆくりなく狩谷望之が古本とも校訂せし本をえてめづらかにおもふあまりに群書類従なるをはじめそのほか二つ三つよみあはせ考ふるうちに尾張ノ国名古屋人野口道直がひめもたる本をかり

| | | | | | | | | | |
|---|----|---|---|---|---|----|---|---|---|
| | | | | | | | | | |
| い | ぬ | 書 | に | わ | か | と | あ | を | も |
| で | 。さ | 加 | ゑ | た | に | い | か | を | の |
| つ | て | へ | り | り | て | へ | ず | え | を |
| 。 | こ | な | て | よ | 書 | ど | う | ざ | を |
| こ | れ | ど | む | み | に | も | れ | れ | え |
| れ | か | し | な | か | い | ひ | た | ば | え |
| は | れ | た | ど | か | と | き | き | え | か |
| た | ふ | る | い | へ | と | も | あ | き | き |
| い | み | を | は | つ | も | う | ざ | い | い |
| と | よ | 友 | さ | 。 | の | せ | に | れ | れ |
| よ | き | だ | は | (| 多 | る | な | ざ | ざ |
| き | 本 | ち | と | 中 | き | もの | む | り | り |
| 本 | な | み | と | 畧 | は | の | 。 | の | か |
| れ | れ | て | て |) | ば | 多 | こ | か | ゝ |
| ば | 書 | い | さ | か | 手 | き | と | る | る |
| 書 | 入 | か | ら | た | ぢ | は | に | 書 | 書 |
| | | で | に | た | か | い | く | と | い |
| | | 板 | 一 | ぬ | き | と | ち | ふ | ふ |
| | | | | な | 書 | | | | |
| | | | | | | | | | |

「於富無泥」(四丁表)
(内閣文庫所藏)

(其の二)

とある。(この「
施富無泥」は刈谷図書館所蔵

「散木并玖集」(三冊本)にも附されており、そ

の内容は刊本と殆ど同じ。署名が忠万左とあ

る。これによると忠順の用いた伝本は、

(1) 狩谷棟斎所蔵の古本を底本として校訂し

た本を入手した。

(2) 類従本、その他二三本を以て校合した。

(3) 野口道直所蔵本が善本であつたのでこれ

をも校合して書き入れた。

(4) ただ田舎に住んでいて書物に乏しく円珠

庵契沖本の入手出来なかつたのが残念で

あつた。

ということになるのである。これは忠順の

伝本に對しての校訂作業の経過でもあり、こ

のことは今一つ同じく「散木奇歌集標註」の

「初音」と題する跋文にも書いてある。

「おのれゆくりなく狩谷望之が校へたるう、

つし巻を得て珍らかにおぼえてよみ見る

に猫たらはぬ事どもおをかめれば群書類

徒なるをはじめその外三つ四つくらべ見

| | |
|---|-------------------------------|
| て | 缺けたる歟猶もおほかたに補ひ正した |
| る | なり。はいめより此集をと思ひよりた |
| る | にはあらず。…… 「初音」57丁裏から四、58丁表へ |
| と | あるのがそれである。 |
| 更 | に狩谷校斎所蔵の古鈔本を底本としたこ |
| と | についてば「散木弁歎集標註」の奥書（岡 |
| 本 | 保孝の識語）によつても明らかである。 |
| 「 | 此古鈔本校斎狩谷先生帳中之物今影照新 |
| 寫 | 以蔵干家。惜乎此本缺卷九以下雜部故 |
| 以 | 一古鈔本繕寫補入。此藍本亦係先生之 |

蔵。嗚呼先生徳崇学富諸書亦称焉。保孝

生平浴於先生之徳澤有年於茲子孫其勿忘

諸

天保二年八月廿四日夜況齋岡本保孝於於蔵計草堂

とある。(第四冊五十六丁)

ところで、この識語は刈谷図書館所蔵の四

冊本「散木奇歌集」にも存している。忠順が散

木集の本文校訂に用いたのはこの寫本であつ

た。この事については、後の寫本の項で述べ

る。

以上のことから忠順は散本集の本文研究に
当たっては狩谷本を底本とし群書類従本を始
めさらに他の諸本をも校訂し、その本文には
校異も記入しているが、忠順本作成の意図も
見えどこまでが狩谷本であるか、その実態に
ついては判明しない。また諸本の名について
も明示を欠いている。本文の内容から類従本
系統に属していることは言えるが、特殊な位
相にあるのが標註本の本文であった。なお、
本刊本についての特色を若干あげてみると、

(一) 本文の奥書に（文献写真・其の五参照）

群書類従二百五十四卷奥書

右散木奇譚集以織部正乗尹本校合了

深見篤慶校読

し

と記していることである。写本三冊本（こ

の事については後述）と比較してみると三冊

本には「深見篤慶校読」の六字はない。刊本

にこれを特に書き加わえているのは何を意味

するかというところ、深見篤慶というのは、同刊

本の奥附に「京都三条通升屋町・出雲寺文次

郎以下書肆名九人の名を列ね、最後に「参

州新堀・深見藤吉^〇とあるこの人を指す。藤
吉は富裕な商人で忠順の女婿篤慶^〇のことで、
校讀とあるのは刊本を上梓するに当たつて岳
父忠順の散木集研究にかなり協力し、おそら
くその原稿を読み合はした役をなしたものと
思われる。單なる商人ではなく學問研究に
をよせた人であつた。^{これは}忠順の感化にもよる所
が多かつたであらうが、一方經濟力もあり、
刊本出版にあたつては篤慶の後援に大いに与
かつたものと思われる。

(二)

次には「散木并評集脱漏歌」(村上忠順補)

として廿九首の脱漏歌を類別して列挙して

いること。内訳は、(1)堀川百首(三首)、(2)

永久四年百首(廿一首)、(3)金葉集(一首)、(4)新

千載集(一首)、(5)新拾遺集(一首)、(6)元永

元年十月内大臣家歌合一番右(一首)、(7)

夫木鈔(七首)である。(文献写真其の六)

ここにも頭注を加えている。

萬葉十
足玉女手珠毛由良尔織旗乎公
之御衣尔織持堪可聞

永久百首
大進
つはさるるのけよいせう
まの麻のこちあらそれ

永久百首
晚主と終る

永久百首
夏衣
夫うみうのあやなやうらけきとそちふれき
夫夏三

扇

永久百首
か
ふらぬはちね
ふらぬはちね
あけ

夏端

永久百首
友の時
あそふと乃ちけてあふりやもあせうけ
ね

晚立

永久百首
夕立
あそふと乃ちけてあふりやもあせうけ
入日

曉月

永久百首
夕月
あそふと乃ちけてあふりやもあせうけ
あそふと乃ちけてあふりやもあせうけ

稲妻

散木集

八十一

散木并詩集脱漏歌

(四冊 六十一丁) (其の六)

(三) つづいて「古今著聞集」・「続古事談」等

の諸書から俊賴に因する記事の抜書を掲載
している。(文献写真・其の七)

(四) 最後に「所載諸書俊賴朝臣歌数」の一覽

表をまとめているのも用意周到を試みとい
うべきである。その内訳は次の通り。(文献
写真・其の八)

金華集(三十六首)・詞花集(十一首)・千載集

(五十二首)・新古今集(十一首)・新勅撰集(十三首)・

続後撰集(三首)・続古今集(十四首)・続拾遺集(五

首)○新後撰集(四首)○玉華集(七首)○續千載
 集(六首)○續後拾遺集(六首)○風雅集(十
 六首)○新千載集(五首)○新拾遺集(六首)○
 新後拾遺集(三首)○新續古今集(十二首)○
 後葉集(十九首)○續詞花集(十一首)○雲葉集
 (十七首)○月詣集(七首)○万代集(四十首)○
 夫木集(四百五十五首) 歌林拾葉三十六首
 三百九十五首 除重出歌廿三首
 三百七十二首)○袖中鈔(四十首)○明題
 集(百四十一首)○和訓栞(四十五首)○古今類句
 (二百十首)(以上諸歌集 28 集・歌教 1567 首掲出)

新後撰集

四首

玉葉集

七首

續千載集

六首

續後拾遺集

六首

風雅集

十六首

新千載集

五首

新拾遺集

六首

新後拾遺集

三首

新續古今集

十二首

後葉集

十九首

所載諸書俊賴朝臣歌數 (四冊六十六丁裏)

(其の八)

以上の如く「散木并歌集標注」は本文の上
欄には歌に即した極めて広汎な頭注を施し、
その外序、跋、俊賴関係の諸資料など完備し
た刊本で散木集研究書として最も秀れたもの
である。この刊本の成立するまでの経緯につ
いては写本の項に後述するが、ここではその
中、刊行を囲る諸資料について述べておきた
い。こゝの資料もすべて刈谷図書館に所蔵
されている。

(一) 包紙

四冊本（写本）の第一冊の裏見返しに刊本上梓に因する書類が貼付されている。まずその包紙には「関校伺書

文久二年壬戌八月官許（朱書）

土井大隅守家来
村上承卿
とある。

（文献写真其の九）

(二) 別紙に

一、標註散本集

四冊

右関校仕度候間此段奉相伺候以上

四月廿六日

土井大隅守家来
村上承卿
とある。

（文献写真其の十）
（下）

(一)・(二)に承^レ卿^ハとあるのは忠順の字である。

(三)、さらに別紙に

「肉極不苦候出来之上^江屯部学問所相納可申

尤其節改済ミ年月日相認メ差出可申事

戊八月十九日」(文献写真其の十^上)

この年記戊^ハは(一)と同じく文久二年(1862)。これ

は忠順の伺書に對しての許可書である。

(四)、さらに外に次のような忠順に當てた伊藤

律之助の書簡がある。

「未得貴意候得共益御清適珍重奉存候小

伊藤律之助

村上承卿様

尚以御案内も御座候共上本願濟の外ニ御

書と申も無之蓋紙ニ初巻一冊ハ御改之

判相据候而已ニ御座候何年相過程之義

有之候而も右之御判御願濟之証跡ニ御

座候
（文献写真其の十一）

この書簡の字体甚だ読みにくいところあり

難読したのであるが大要はつかめる。即ち、

(1)、忠順の「散木集標注」の上梓がはかどら

なかつたため、刈谷の志士松本奎堂（この

ことについて、は写本の項に後述する。）を介

して忠順は伊藤律之助に事の次第を訴えた

(2)、忠順の草稿は林家塾吉田某の所に数年間

空しく滞っていたことが判明した。

(3)、律之助はそこで林家の改済の許可を得て

この事を忠順に報じた。この日付は文久二

年八月廿八日。

以上が伊藤律之助の書簡内容の概要である。

(五)、これに対する忠順の返書もある。その内

容は次の通り。(文献写真其の十二)

「閏月廿八日御認之朶雲十一月二日到來
辱拜誦至此節候而も寒風甚候へ共倍御多
祥可相成御勉学奉慶賀候著書上木願ニ付
彼は御高配相成候事千謝不尽之至候高底ニ而早
速相済恭悅仕候上木次第願納可仕候
十一月三日返事也」
忠順のこの返事の字体も甚だしく読みにく
いが、大体以上の翻字になろう。
伊藤律之助に對する感謝の意を表明した御
礼状である。

以上資料を中心に「散木集標注」の上梓に
 ついて述べてきたが、この上板に当たつては
 まずその伺書を提出したのが文久二年四月廿
 六日でそれ以降思わざる原稿の滞つていた空
 白状態が続き、上板の仕事にとりかゝつたが
 今十一月三日以後であつたろう。かりに出版
 に要した期間を短かくしてみても一年はかゝつた
 であらうし、するとその完成は文久三年。通
 くみれば元治に入つてからかも知れぬ。
 「標注」の自序には嘉永三年(1850)とあるが勿論

これは刊行の年ではなく忠順の散木集研究は
すでに天保十二年(1841)に始まり、かりに刊本完
成を文久三年(1863)とすればこの間ハ廿三年間であ
る。この間忠順は散木集研究に精進し、その
果てに於てようやく刊本「散木弁歌集標注」
は陽の目を見るに至つたのである。自序にあ
る嘉永三年は忠順の初稿の頃をそのまま記念
として残したのであつた。

(二)

写本

(1) 内閣文庫所蔵本「散木奇歌集」(十卷三冊本)

本書の奥書には写本の段階を示す次のよう
なものがある。

(A) 「右散木奇歌集以織部正乗尹本校合了(茶書)

従四位下左京大夫行奎頭源朝臣従四位

帥大納言経信男

(B) 右散木奇歌集

元禄六年八月下旬得古寫本於円珠庵村

校了 密乗沙門契冲

(C) 朱書入契冲茶色類従本墨書吳臣其外後

人書入 元本寛永之古寫本

天保二卯年十一月令書寫追々校合書入

畢 忍屋大野広城

これによると大野広城が、天保二年十一月

に書寫したものである。書寫に当たっては、

(A) 類従本を参考酌してこれを茶色にし、(B) すで

に契沖は古写本を得て対校しており、この契
 沖の頭注などを朱で書き入れ、さらに(C)染臣
 其他後人の書き入れを墨で校合書入を終った
 という段階を示すものである。いわゆる大野
 本と称せらるゝ写本である。
 大野広城は「元本寛永之古写本」と言つて
 いるがこれこそ契沖本のことである。大野本
 は契沖本を底本として校合を試みて本文研究
 に当たつた。それには葦・朱・墨など色分け
 を施しそれぞれの本文の識別方法をとつたの

である。

次に大野本の本文上の特色をあげると左の

如きものである。

(1)

春駒をよめる

春駒はあさかの沼にあさりしてかつみのう

らはふみしだく也(三月)(題と歌を欠く)

(注・大野本と同系統の寫本も参考として

あげておく。(1)は上賀茂神社三手文

庫本も全いく欠く。以下例示の通り)

(2)

三月の歌「立かへり春思ふだに……」の左注「
はしがきにさとをばかれずとかけり」を欠

く。(昌平坂学問所旧蔵本・三手文庫本全じ)

(3)

全「暮てゆく春を思ふも……」の左注「おくに
あまのをぶねもとかけり」を欠く。

(神宮文庫墨本・小沢蘆庵本・三手本・昌平坂本も同じ)

(4)

浦卯花

卯花のころほひなれや磯の浦に立つしき波

のあるかと思へば(四月)(題と歌を欠く)

(三手本同じ)

卯花のさきほひはしきそわ浦みき川き、浪のきこひもく

凡そをえつれりや云まのふみきとをえつれ

ゆき

卯花のさきほひにけし、白きやの崎ほしきとをえつれ

卯花のさきほひ

千雜下 訛語

卯花のさきほひはしきそわ浦みき川き、浪のきこひもく

遠見卯花

卯花のさきほひはしきそわ浦みき川き、浪のきこひもく

卯花のさきほひ

卯花のさきほひはしきそわ浦みき川き、浪のきこひもく

卯花のさきほひはしきそわ浦みき川き、浪のきこひもく

(5) 数ならぬ我とはなしにほとゝぎすよを卯の

花の垣根にぞ鳴く（四月）（この歌を欠く）

（三手本も同じ）

(6) かぎりなく思ふ心をしらするは花橘のほ

ひなりけり（四月）（この歌を欠く）

(7) 郭公をよめる

ときつ鳥なかぬ雲井にといろきて星の林は

うづもれぬらん（五月）（題と歌を欠く）（三手本も全じ）

(8) 泉をよめる

いしみつゝ隙もる水にたはぶれてつてにも

夏を聞わたる哉(六月)(題と歌を欠く)(三手本同じ)

(9) しほみてばのじまが崎のさゆり葉に波こす

風の吹ぬ日ぞなき(六月)(この歌重出)(三手本
同じ)

(10) ひまもなきあみにも鳥の驚かであそぶ羽風

に花やちるらん(萩教部)(欠く)(三手本同じ)

(11) 恋部上の歌「かき絶えてみつきに成ぬし」の左

注「みつきといふはつくしのふのかどでなり」

を欠く。(三手本・神宮文庫甲乙二本・小沢本・岸本本・冒平坂本・

尚舎源忠房本等諸本同じ)

(12)

經年恋

君こふとなるみの浦のはまひさぎしほれて

のみも年をふるかな（恋部上）（題と歌を欠く）

(13)

思へたゞ袂は露にそぼぬれて……とすぐ次の

「はるかなる雲井をわたる雁がねも」の詞書

がそれぐ入れ替つてゐる。（恋部上）（三手本目じ）

(14)

「浮身なら人もつらしと」（恋部上）の作者「

四條宮甲斐」の名を欠く。

(15)

恋部上の歌「たまくしげふたみの浦に」の

題「寄鳥恋」を欠く。

(16) あさましやは何事のさまぞとよ恋せよと

てもむまれざりけり(恋部下)(欠く)

(神宮文庫本ニ本・小沢・岸本・三手・昌平・尚舎各

本同じ)

(17) 恋草をさしにうつめる舟なれば(恋部

下)の題「海路恋」を欠く。(神宮文庫兩本・

小沢・岸本・三手・昌平・尚舎各本同じ)

以上の十七個所の持つ欠陥のうち(6)、(12)、(14)、(15)、

等の脱落は本書のみの特色であるが他は三手

本・神宮文庫甲本乙本の両書(甲本・乙本は

園根慶子博士の呼称に従った小沢本・岸本本
 ・昌平坂本・尚舍本等と共存する諸例である。
 特に大野本は三手本と近い関係にあることか
 以上の例示から知られる。
 次には、以上の大きな欠陥とは別に大野本
 自体に存している詞書、歌などにみられる語
 句の相違がかなり多い。これらについて例示
 し、大野本の全貌を通観したいのであるが、
 その前にまた問題が残っている。それは本
 書に於ける歌の配列上の問題である。大野本

系統の諸本凡てこの配列上の問題を有して
いるのではないが、これは諸本の系統を考える
上に重要な手がかりの基底となるものである。
まず、(9)の歌の重出にかゝる「六月」の歌の
配列に他本と異なる個所がある。これは類従本
系統と大野本系統の二種に分かたれる大きな
境界線となるものである。尤も「六月」の歌
の配列上の順序に異状の認められるのは、大
野本・三手本及び神宮文庫本の甲本（村井古
巖の奉納本の八卷二冊本をいう。）の三本であ

る。(但し、神宮甲本には重出はない)

大野本・三手本における「六月」の歌の配列順

位の他本と異なるのは次の、

(322) 古は塵をだにこそいとひつれ雨にしほれし

け(類徒牽)

るる(イ)

なでしこの花(322)の番号は南根氏の「散木奇

歌集の研究と校本^Lによる。以下同じ)

(323) なでしこの花みる程の心にて弥陀のみくに

をねがはましかば

の二首の間に『泉辺納涼といへる事をよめる^L』

の詞書から一歌は(330)ひさきおふる片山蔭の……^L)

| | | | | | | | | | |
|---|---|----|----|-------|---|-----|---|----|-------|
| 配 | の | の | 清 | は | と | 稿 | い | | (338) |
| 列 | で | 歌 | 水 | 肉 | 共 | に | る | の | し |
| 上 | あ | を | 涼 | 題 | に | 既 | と | 吹 | ほ |
| の | る | 再 | し | は | 脱 | 出 | い | ぬ | み |
| 異 | 。 | 出 | さ | な | 落 | (8) | つ | 日 | て |
| 状 | と | せ | に | か | し | 「 | た | ぞ | ば |
| は | こ | し | … | つ | て | い | 形 | なき | 野 |
| 大 | ろ | め | 」 | た | い | し | に | 」 | 島 |
| 野 | が | て | の | が | る | お | な | ま | が |
| 本 | 神 | い | 次 | (329) | 。 | っ | つ | での | 崎 |
| 、 | 宮 | る | に | 「 | 三 | 、 | て | の | の |
| 三 | 本 | 不 | また | 辰 | 手 | 隙 | い | 八 | さ |
| 手 | 一 | 都合 | し | の | 本 | も | る | 首 | ゆ |
| 本 | 甲 | を | ほ | 市 | も | る | 水 | が | り |
| と | 本 | 犯 | み | の | 同 | 水 | に | 挿 | 葉 |
| 一 | ） | し | て | う | じ | 」 | … | 入 | に |
| 致 | に | て | は | る | ） | が | 」 | さ | 波 |
| し | は | い | ば | ま | こ | 詞 | の | れ | こ |
| て | 同 | | 」 | の | 間 | 書 | に | て | す |
| い | じ | | | | は | | 本 | | 風 |
| | く | | | | | | | | |

るが重出はない。これはどういうところから
 来ているのか。そのことについて考えてみた
 い。これは大野本・三手本に於ては書写の際
 (338) の詞書「皇后宮権大夫師時の家にて歌合に
 野風をよめりける」と、(323) の詞書「なでしこ
 をよめりける」とすぐ続いて (338) の詞書に対し
 ての歌がないため他本によつて補入し、その
 後はまた原本のまゝ写して行つたところ原本
 ではこの詞書までを前に移して歌はその後の
 方にあつたためこの歌が重出するといふ結果

になつたものである。この点南根氏の推定
に筆者も賛同するものである。一方神宮本へ
甲本に重出のおこなはつたのは同本が
題詞までを挿入するといふ形をとつたため
ある。

今まで述べた事をここで南條の分のみの文
献へ写真によりその記入方法をみると、大
野広城は「いにしへは塵をだにこそいとひつ
れ……」の歌と「ひさきおふるかた山蔭の……」の
歌との間に「下のなでしこの花の歌ここに入

おきんをうたふ

きこふふしおきんをうたふふしに
おきんをうたふ

四十一 酒つゆももむしらにぬきしつゆはきよきつゆ

五十一 暑おのもしのゆふまけにむしらをきよきつゆ

金命ま権をうたふ時ハきよきつゆに

風をうたふ

六十一 暑おのもしのゆふまけにむしらをきよきつゆ

あししをうたふ

二 あししをうたふはきよきつゆに

大野本「散木奇歌集」(内閣文庫蔵)

る」と書入れ挿入の歌は「ひさきおふる」の上
に「ハ」の番号を附し以下「汐みてば」の上に
は番号「十六」を記入して、類徒本の順序に従う
ため「なでしこの花みるほどの」の歌には番
号「一」を記入し、右肩に小書きで「此歌上のい
にしへは塵をの次に入、是にならべて見るべし」
と書入れており、「辰の市の」の歌の上に番号「七」
を記入、「汐みてば」の歌の上には「上已出」と
し、さらに右側には小書きで本歌の題詞「皇
后宮權大夫師時の八條の家の歌合に野風を」

と群書類従本のままの表現で書き入れてある。

かくの如く大野広城は群書類従本と対照し

つゝ丹念に配列異状の個所を整理しているの

である。

最後に本書のみの持つ主要な特色を左にあ

げておこう。

(1) あさりせし水のみさびにとぢられてはすの

浮葉にかはづ鳴也(五月)

他の諸本にずれも「ひっし」
としてする。

(2) 君が代は千年にひとつとる石のとな

らん程をこそおもへ(祝部)

他の諸本いずれも「まゝで」とする。

(3) むかし人いかなるかばねさらされて此島に

してなを残しけん(羈旅部)

他の諸本いずれも「しも」とする。

(4) むろにまかりて日のありければ(悲歎部)

右の詞書諸本いずれも「あれ」とする。

(5) 大方かさねて彼国たへなる事を(釈教部)

右の詞書諸本いずれも「ふさねて」とする。

(6) 「殿下にてこひの心をし (恋部下)

右の詞書の下、諸本いづれも「よめる」がある。

(7) 「又女にめして男に給はせける (恋部上)

右の詞書の下に諸本いづれも「に」がある。

(8) うかりける人を初せの山あらしよはげしか

れとは祈らぬ物を (恋部下)

他の諸本いづれも「おろし」とする。

(9) 「別当実行の六條の家にて恋の心をよめる

(恋部下)

右の詞書諸本いづれも「よめる」がない。

(10) 網 引する みつの浜べに さはがれて あけをさ

ゝのへたつかすみなり (雑部)

他の諸本いずれも「かへる」とする。

(11) 櫻 だにまことに句ふ頃ならば道を秋とも思

はざらまし (雑部) 諸本いずれも「とは」とする。

(12) 三日月のかけにかいよふかけろふのほのほ

かにてよをすぐすかな (雑部)

他の諸本いずれも「ほのほかにて」と

ある。

以上の十二例は本書のみの特色であるが歌
 からみて總じて他の諸本の方が正しいように
 思われる。これらはおそらく書写の際に起つ
 た謬誤ではなかつたかと推測される。先に述
 べた(一)大きな脱落十七例と(二)この十二例(小
 異ではあるが)を総合することにより大野本
 の全体的欠陥が明らかになつてくるのである。

(2) 三手文庫蔵「散木奇歌集」(十卷二冊)

この「散木奇歌集」は今井似閑(明暦三年—享保八年没。67才。京都の商人、契沖門下)が上賀茂神社に寄進した本である。奥書がないので書写過程が明らかでない。しかし、似閑は契沖に万葉を学んだ人であり、契沖本「散木集」(寛永本)も見ていたと思われるし、その本文も大野広城本と近いから契沖本から出て

本書の本文については(1)の大野本の本文に
於て見た如く非常に近似している。こゝら大

野本と同じものについては省畧して次に本書

のみの本文上の特色をあげておく。

(1) 山里はつれづれとなく鶯の声より外友なか

りけり(正月)

他の諸本いづれも「つれづれ」に「外に」とする。

(2) 梢より風にもまるゝ花なればちりても水の

浪ぞおりける(二月)

- (7) 「屏風の絵に春山里に人々ながめてゐ侍け
- の詞書は諸本いずれも「教縁」とする。(二月)
- (6) 「奈良の秋合に永縁にかはりてよめりける
- は諸本いずれも「いふ」とする。(二月)
- (5) 「花下旅宿といへる事をよめる」の詞書
- 他の諸本いずれも「おし」とする。
- (4) 「おしてだにいはれざりけり櫻花」(二月)
- 他の諸本いずれも「ふしを」や「へ」とする。
- (3) 「身のほどを何思ふらんふし咲ける」(三月)
- 他の諸本いずれも「水」を「池」とする。

るに……(三月)の詞書、諸本いずれも「る

たるに」とする。

(8) 「郭公けふは五月といふがほに……(五月)

諸本はいずれも「いひ」とする。

(9) 「さらし井のこのしたかげに行きふれて……」

(六月)の歌、諸本いずれも「行きふれば」

とする。

(10) 「……夕づく夜をみてよみ侍ける……(八月)

の詞書は諸本いずれも「よめ」とする。

(11)

「おなじ心をよめる

をし鴨のかづくいはまの薄氷けさやうはげ

のとぢかさぬらん
（十二月）

（以上の詞書と歌とを欠く）

(12)

「大貳仲実の八條家にて……」
（悪部下）の詞書は諸本いずれも「長実」
とする。

(13)

「こぎかへれかじもみとろしすはえして……」

（雑部）の歌、諸本「もとれ」
とする。

(14)

連歌「ほねあがりすぢさへたかきこまなれ

や」の作者を「顕隆」
とする。諸本はいず

れも「敦隆」とある。

以上の諸例は三手本のみの持つ特色で、明らかに誤謬と思われる点もある。人名など特にそうであり、これらは誤写、思い違い等から起つたものであろう。

すでに(1)大野本に於て「三手本も同じ」と私注を加えておいたが、両本の共通点は非常に多い。またこれまで指摘しておいた以外に、も両本共通の箇所は詞書・次の語句の上に数

多く見出すのであり、同じ大野本系統本の中
 にあつても、大野本自体と三手本とは最も近
 似してゐる。これらの点から三手本は契沖本
 (寛永本)の系統を引くものであることが明
 らかになつてくるのである。
 なお、本書のみの持つ最大の欠陥としては
 八月の歌に詞書を含めて四首脱落してゐ
 ることである。その個所には朱筆で落丁と注
 し、その歌を行間に補入してゐる。今その個
 所を示すと次の通りである。

ㄱ

河内守經國かのくに、面白所有と申
しければ、師殿思ひておはしけるに天の
河といふ所にてさい中將の七夕つめ
にとよめる所なりとて舟をといめて
河のほとりにおりゐて遊ばせ給けるに
かはらけとりておのゝ
けるによめる

△ノ千鳥なくあまの河辺にたつ霧は雲こそみゆ

る秋の夕ぐれ

霧の朝にあさひさしてやうく
きえけるを見てよめる

△又あさひさすおがはの霧の村きえてたけから

ぬ身に世をぞ恨る

右兵衛督伊通のもとにて秋霧隔水
といへる事をよめる

△3 音羽河きりの外なるたきならばいはもる玉

の数 は み て ま し

田上にて霧のたちふたがりてせいのをとばかり
しければよめる

△4 旅人はきりをわけてやとほらまし河せの浪

の音せざりせば

」

以上四首である。この個所次の写真に示し

ておく。なお、本書には朱筆を以て散木集か

ら勅撰集や夫木集等への入集歌の注記を施し

、また多くの校異を書き入れ批判なども加え

ている。(写真参照のこと)

(3) 神宮文庫蔵「散木奇歌集」(八卷二冊本)

本書は村井古巖の奉納した本で、林崎文庫(内宮)の旧蔵本である。一丁九行、歌は一行書き、雑以下の二巻が欠けている。奥書はない。本書は先に述べた内閣文庫の大野本と大體同じ特長を有しているが、他にも若干の欠歌がある。諸本中でも比較的古い写本といわれているものである。(南根博士のいう甲本)

次に本書の主要な欠陥をあげると次の様なものである。(他本と共存の場合も含む)

(1) もろともに今ぞ鳴なるほととぎす 八声の鳥

はをうがつまかは (五月)

以上示した下句の個所を欠く。(昌平坂本も同じ)

(2) 「春のうちは君がなげきにー」 (二月)

右の歌の詞書「返し」を欠く。(昌平坂本も同じ)

(3) 衣手のさえゆくまゝに神なびのみむるの山

に雪ほふりつゝ (十二月) (金葉集入集)

右の歌を欠く。

(4) 君がためかけるみのりの水莖に我身をさへ

もすゝざつるかな (釈教部)

(5) 「神力品の心をよめる」
(4)の歌につづく「大空をみのりの風や」の詞書

右の歌・詞書を欠く。

(6) あし⁷がまのことのゆかりは大方の耳のつて

にもきこえざりけり^L (全) の一首を欠く。

(7) 人はいさ光のすぢをしるぞともおなじ佛や

しらばしるらん (全)

右の歌を欠く。(昌平校本も同じ)

(8) 「あさましやちよの法にも……」(歌教部)の歌

の詞書 「その國に生ぬる人は昔の事をしる

さとりをえてそのかみの事をしるといふ事

をよめる」を欠く。

(9) 「諸の花くさぐさにさきみだるといへる事をよめる

そこばくの花のひもとく庭の面にをしのけ

たるははちす也けり」(全)

右の詞歌と歌を欠く。(神宮文庫乙本・小

沢本・岸本・昌平坂本・尚舍本などの諸本同じ)

(10) 「経年恋し」(「君ふとな」の詞書を欠く。(恋部上)

(大野本・三手本同じ)

(11) あさましやは何事のさまぞとよ恵せよと

てもむまれざりけん(恵部下)の一首を欠く。

(神宮文庫乙本・小沢本・岸本本・大野本・三手本・

昌平坂本・尚舎本等の諸本も同じ)

(12) 「海路恵し(「恵草をさしに」につめる無なれば……)の詞書(全)を欠く。

(神宮乙本・小沢本・岸本本・大野本・三手本・昌平坂本・尚舎本等同じ)

以上十二例の中、(3)・(4)・(5)・(6)・(8)の五例が本書

のみの持つ欠陥である。これに更に大野本系

続本としての特色たる「六月」の歌の配列上に
 異状の存してゐることは大野本の項ですでに
 述べた通りである。

以上の本書に於ける大きな欠陥の外に本書
 のみの特色とみらるべき語句の相違、或いは
 小異（助詞・助動詞などの相違箇所）を調査
 してみると凡そ九十箇所ほどある。これに「詞
 書」の異同を加えると更にその箇所は増大して
 くるのである。

今、詞書、小異の箇所は省略してその主要

な歌のみを少し例示してみると次の様なものがある。

(1) いとゞしく声なつかしき鶯はいはねもや梅

の香ににほふらん（正月）（諸本は「はね」とする）

(2) 心あらばとまうし物を梅の花たが里よりか

にほひきつらん（全）（新古今集入集）

諸本「とほまし」が多い。但し書陵部本は

「とほし」とある。

(3) めぐむよりけしきことなる花なればさむく

● も枝のなつかしきかな (二月)

(諸本「かねても。但し書陵部本は「かねてとする。」)

(4) 春風にあらぬ身なれぬ桜ばなたづぬる人に

いとはれにけり (全) (諸本「なれど」とする。)

(5) 君がためやよひになれば夜毒さへあべの重

ち | にはろこつむ也 (三月) (諸本「いちじ」とする。)

(6) をとせぬは待人からかほとゝぎす誰おしへ

けんゆへ | ならぬ身を (五月) (諸本「敷」とする。)

(7) 流しつるけこのみわもり□そひてさやたの

早苗とりもやられず(全)

諸本□の個所に「数」あり。

(8) 蘆のやの垣ほのぐとしらむまでもえあかし

てもゆく屋かな(全)(諸本の中、大野本・三手

本は「軒」とする。他は「ひま」とする。)

(9) 沢□なる室も風にはかられて今日を秋とや

鴈につぐらん(六月)(諸本□に「べ」あり。

(10) 玉かしはすゑこす風にはかられてまだきに

きみや声たてつらん(全)

諸本はいずれも「鹿^ロとする。

(11) セタの天の川ゆかこよひさへながれやすら

んあかぬ涙を（七月）

この歌異訓多し。類従本は「たまゆり」とあ

るがその他「たまゆか^カたまゆ^ユる^ル等とあり、ま

た下句諸本いずれも「涙^{ナミ}に^ニとある。

(12) 山里はすかこたけかさきはやす萩女郎花

こきまぜてけり（八月）

この歌も異訓多く、類従本は「す^スと^トか^カとあり

この訓が多いが向宮本では「す^スこ^コか^カ岸本本で

は^ㄅか^ㄅこ^ㄅか^ㄅ_Lとある。

(13) 花薄 まろをれいとそくりかけて絶ずも人を

まねきつるかな (全)

これも異訓多く類従本^ㄅま^ㄅそ^ㄅほ^ㄅの^ㄅ_L、書陵部

岸本兩本は「ま^ㄅそ^ㄅを^ㄅの^ㄅ_L、神寛乙本では「ま^ㄅあ^ㄅ

を^ㄅの^ㄅ_Lとある。

(14) はやく出てかど田にやどれ秋の月はのぼる

つき^ㄅの数や見ゆると (全) (諸本は「露^ㄅ_Lとする)

(15) 紅葉 ちる清滝川にふれを^ㄅおして名にながれ

(全) (諸本「ふ^ㄅな^ㄅで^ㄅして^ㄅとする。)

(16) すみのぼる心や空をはらふらん雲のちりみ

の秋のよの月（全）（金葉集入集）

（諸本多くは「ぬぬ、但し岸本本は「ぬる」とする）

(17) こがらしの雲うちほらふたかねよりさえて

も月のすみのぼるらん（全）（千載集入集）

（諸本は「吹、結句は「かな」が多い。但し、「ら」

ん」は他に大野本・三手本がある。）

(18) むら雲や月のむらをばのごふらんはれゆく

たびにてり増るかな（全）（金葉集入集）

（諸本いづれも「くま」とする。）

(19)

け|さ|より|は|み|は|らの|池|に|つ|ら|ゝ|ぬ|て|あ|ぜ|の

む|ら|鳥|隙|も|と|む|ら|し|(十二月)

(類|徒|本|系|は|「けふらん」とする。)

(20)

君|が|代|は|松|の|う|は|葉|に|を|く|露|の|つ|も|り|て|よ

も|の|く|に|と|なる|ま|で|(祝|部)|(金|葉|集|入|集|)

諸|本|は|す|べ|て|「海」とする。

(21)

夜|を|こ|め|て|朝|ま|つ|を|の|ゝ|草|し|げ|り|し|ほ|る|ゝ

袖|は|露|の|玉|水|(別|離)|(諸|本|は|「立つしげみ」とする。)

(22)

住|吉|の|ち|ぎ|の|か|た|そ|ぎ|ゆ|き|も|あ|は|で|霜|を|き

ま|よ|ふ|ゆ|き|は|き|に|け|り|(神|祇)|(新|後|拾|遺|集|入|)

(23) (諸本 いずれも「冬」とする。)

(23) ならくかの底までませやけれなくほにて

る光やみもせする。(歌教部)

(諸本は「させ」けれは諸本「け」らし。)

但し神宮乙本・大野本は本書と同じ。また

諸本の結句いずれも「けすがに」とある。

(24) あが袖のしほるとなればながめつゝ法をと

くらん水にぬれめや。(全)

(諸本「ながれつゝ」結句は「ばや」但し、大野

本、三手本は本書と同じく「めや」とする。)

(25) 春雨のあしとは人のふりくれどまがなくも

みえず程のひろきに（全）

（諸本「ま^ハなく^ハ」^ハ「ひろ^ハさ^ハ」^ハとする。但し類従

本系は「ま^ハなく^ハ」^ハを「さ^ハなく^ハ」^ハとする。）

(26) これをみよむつ田の淀にさでさしてしほれ

ししづのあかの衣とは（恵部下）（千載集入集）

類従本「あ^ハさ^ハ衣^ハか^ハは^ハ」^ハとする。

(27) 露を □ みたはるに白ふ萩のえのえもいひし

らぬ恵もするかな（全）

諸本 □ の個所に「重^ハ」あり。

(28) 霜がれの野べともなしに春たてばもえずも

物を思ふ頃かな (全) (諸本は「もえて」とする)

(29) なこそてふ言葉も君がことぐさを閑の名ぞ

とも思ひよるかな (全) (金葉集入集)

(類従本系は「言葉は」「ける」とする)

(30) 口おしき雲井がくれにすむたつも思ふ人に

は見ゆなる物を (全)

(諸本いずれも「口おしや、類従本系では「見

えける」とする)

以上の外にまだその例は多く見出だすので
あるが、勅撰入集及び主だった歌の異同につ
き見てきた。その總合した結果から本書のみ
の持つ明らかなる誤謬、脱落と思われなものも
多く中には(28)の如く全く反対の意味になる歌
もある。勅撰集入集歌、或いは歌合に於ける
作品(30)の如きをそれぞれでも本書の
如き訓みにはなつていない。こうした例から
他の語句の相違も凡そ本書の誤写と推定され
るものが多く以上の不備をもつのが「神宮文庫」

甲本の本文上の欠陥といふことが出来るのである。

一丁十二行。歌は一行書きである。本文の

内容からみれば「六月」の歌の配列には大野本、

三手本と同じ形をとつているが、以上見てき

た歌の本文の点、又詞書の表記など寛永本と

は異なつてゐる所から契沖本から出てゐると

は言えない。そういう意味から本書は大野本

三手本とは孤立した位相にあると判断される

写本といふべきである。

(4) 神宮文庫蔵「散木奇歌集」(八巻八冊本)

この写本も同じく村井古巖の献納本。表紙には「散木抄畧本」とある。但し中は各巻とも「散木奇歌集」となっている。一丁十行、歌は二行書きという特色を有し(3)の神宮文庫甲本とは形式の上からも全く異なっている。神宮文庫乙本と呼ばれるものもここにその理由がある。

季四卷までには甚だしい錯簡を生じている。

また「俊成卿女集」^L「堀川院御百首抄」^Lなど

が混入して同冊になつている。かかる乱丁は

他本には勿論見出せなく本書のみの特色であ

る。第五祝部以下四巻四冊へ雑部の巻は欠

には錯簡はない。ただ以上の錯簡を有し他本

の混入などのあるところからして先にあげた

奥書が散木集そのものの写本の日であるか否

かは岡根博士の指摘の通り決定しかねるので

ある。文亀二年（一五〇二）は中世であり、

その書寫年代はかなり古いことは言える。か
 つて神宮文庫を訪い本書の錯簡個所を校正する
 のにかなりの時間を要した筆者の体験を今思
 い出すのであるが、不要な混入個所を除去し
 他本を参照して順序を正すと多少の欠点は
 残るが尋常普通の散木集が再生される。
 本書の題には「散木奇歌集卷第一」と巻。
 を入れており他と異なる。(第二以下も同じ)
 さて錯簡乱丁の全部とこで示す紙幅はな
 いが、その特色を一部見てみよう。

この乱丁は春部（正月）の二丁表からすでに
生じている。（歌の番号は園根慶子氏著「散本奇
歌集の研究と校本」による。）
巻頭一丁表は普通であるが一丁裏（5）「いっ
しかと末の松山かすめるは」は二行書きのた
めこの上句で終り、二丁表には「堀川院御百
首抄・以法橋玄仲本写之」とあり他の歌集が
混入してきているのである。そればかりでは
なく、つづいて「俊成卿女集」も混入し、こ
の他本二書の間にも乱丁あり、四丁表は「俊

| | | | | | | | | | |
|-----------|--------------|------------|--------------------------|--------------|-------------------------|----------------------------|-------------------------|---------------|--------------|
| までが綴じこまれて | 日山ふもとをのに子日して | 裏に逆もどりして以下 | たるをみてよめる | もその詞書の後半 | 程 ^し までが配列されて | の詞書前半 [「] 伊勢に侍ける頃 | みつしほに ^し の歌から | 庫乙本では冬部六丁に | かくして正月の歌の大きな |
| いる。 | し | (18)の歌から | ^し はそのままつづかず四丁 | 「よもの山辺かすみわたり | いることである。 | むつきの四五日 | (18)「都へといそぎて | (11)「春霞たなびく浦は | 乱丁は、 |
| | (上句のみ) | (21)の歌「春 | | | しか | | | | 神寛文 |

| | | | | | | | |
|-----|-----------|---------|---------------------|------------|-----------|------|-------------|
| さ | ら | に | 七丁 | には | 正月 | (38) | 「初春のもち月にも |
| る | か | ゆ | なれ | ば | な | べ | てならずはあかき成けり |
| の | 詞書 | の後半 | 「見 | て人々 | 歌よまむなどいふを | | |
| 聞 | て | など | かよまざらん | 兼盛が集にもある心地 | | | |
| こ | そ | すれとてよめる | Lから始まり、 | (43)の歌の | | | |
| 前半 | 「 | 鶯は春待つ | けていつしかのLで終り、 | | | | |
| 八丁 | は | 正月 | (50)「春雨はふりしむれども鶯の声は | | | | |
| しほ | れぬ物にぞありける | Lの詞書の後半 | 「……ま | | | | |
| つり | けるに | 雨中 | 寫といへる事をよめるLに始 | | | | |
| まり、 | (54)の | 歌の詞書の前半 | 「大殿より歌繪など | | | | |

| | | | | | | | | | |
|---|----|------|---|---|----|---|---|----|---|
| 残 | いた | ノ | へ | を | り | 前 | に | つ | 寛 |
| な | た | 三 | 乙 | ひ | し | に | 梅 | れ | し |
| る | み | ） | 本 | ろ | お | 花 | 花 | 仰 | く |
| ら | ま | に | の | ひ | さ | 風 | に | あ | 書 |
| ん | つ | 移 | 四 | と | な | に | 従 | り | た |
| | ら | 動 | ノ | る | き | に | ひ | け | る |
| | の | し | 上 | か | ち | 従 | て | れ | 絵 |
| | 山 | 十 | ） | た | この | て | い | ば | を |
| | に | 一 | か | あ | む | 男 | る | 屋 | こ |
| | ち | 丁 | ら | る | か | の | と | の | れ |
| | る | に | 再 | 所 | ひ | な | こ | つ | 款 |
| | 花 | 配 | び | を | ぬ | を | で | ま | に |
| | や | 置 | 前 | よ | て | し | こ | に | よ |
| | ふ | さ | の | め | 散 | の | の | 女 | み |
| | り | れ | 方 | る | か | う | 詞 | 男 | な |
| | けん | (71) | へ | し | り | へ | 書 | にあ | し |
| | 袖 | の | 乙 | は | り | に | の | ひ | て |
| | の名 | 風 | 本 | 冬 | た | か | 後 | た | た |
| | | を | の | 部 | る | く | 半 | ま | ま |
| | | | 一 | | 梅 | | つ | | |

致を以て十三丁が終つてゐるのである。

以上は正月の、しかも錯簡の特に著しい個

所のみを一つの例として述べてきたのである

が、こうした点はこの神宮本乙本には第一（

春部）から第四（冬部）までずっと続く。そ

の向には散本集自体のみでなく他本の混入と

いう複雑な要素が加わり問題は一層複雑化する

る。同じ正月の致が正月という月に於て乱丁

が生じていればまたしも、そうではなくて他

の月にまたあるという乱丁の形をとつてゐる

のであるから、一つの月の歌は他の月の歌の
配列とも関係を相互に保ち合うということに
なるのである。しかも歌が二行書きのため、
一首の歌が上句と下句に寸断され別々な丁に
分離される。この事はまた長い詞書の場合も
全いで上半、下半と分離して配列されるとい
う結果を生じたのである。これらと調整すれ
ば正常な普通の形にはなるがともかくも是た
しい錯簡乱丁は乙本のみを持つ特色というべ
きで、こうしたままでは奉納されたものであ
る

う。

さて、神宮乙本は大野本系統に属していて、これら同系統の他本と歌の本文及びその詞書とを類従本と比較した場合かなり共通の面を有することは当然であるが、そのうち特に小沢本と岸本本に共通している点が多い。次に詞書まで考慮に入れて検討するのが本当であるが全り煩雑になるので一応除外して歌の本文のみを対象としてまず本写本の脱落歌（これは本書のみの特色でない場合も含む）をあげると

左の如くである。

(1) いっしかと末の松山かすめるはなみと共に

や春もこゆらん(正月)

(この歌下句を欠く。)

(2) 風をいたみまつらの山にちる花やふりけん

袖の名残なるらん(二月)(この歌も下句を欠く)

(3) とりつなげたまたよこのう放れ駒つういが

岡にあせみさくなり(三月)

(この歌も下句を欠く)

(4) くる人もなき山里はかやり火のくゆる烟ぞ

友となりける(六月)(岸本本も欠く)

(5) 秋はぎの下葉に月の宿らずばあけてや露の

教をしらまし(八月)(結句欠く。小沢本同じ)

(6) 衣手のさえゆくまゝに神なびのみむろの山

に雪はふりつゝ(十二月)(下句欠く。)(金葉集入)

(7) うちはへてたのむみやまのあをつくら苦し

みなきはわが獨かな(秋教部)

「授記品の中に」(次の歌の詞書)

右の歌と詞書脱落(岸本本、小沢本も全じ)

(8) 「難思光仏」

「人はいさ光のすぢを知るぞとも同じ仏や知

らば知るらん」(全)(以上の詞書と歌を欠く。小沢本、岸本本同じ)

以上八首(詞書も含めて)の中本写本のみの

脱落歌は(1)(2)(3)(6)の四首である。これは神寛

乙事の書写の場合の書き落としてであろう。

次に諸本の中に於て本書のみの語句の相違

がある。それは次の通り。

(1) おいらくの腰ふたへなる身なれども卯杖を

つきて若れをぞつむ(正月)(諸本は「若菜」)

| | | | | | | | | | |
|-------------------------|-------------------------|-------------------------|------------------|---------------------------------|-------------------------|----------------------|-------------------------|-----------------------------|---------------------|
| (2) いまぞ知るこえつる山のはけしさに年もう | 杖をつくにや有らん(全)(諸本は「こえくる」) | (3) 山里はつもれる雪のいつしかと消るぞ春の | しるし成けり(全)(諸本はける) | (4) 梅の花ちる本のもとに風吹ば(二月)(諸本は「梅ばな」) | (5) はく人もなき古里の庭のおもは花ちりてよ | りみるべかりけれ(全)(諸本は「こそ」) | (6) 櫻花たをれど散らぬものならばこずゑに人 | のこさましやは(全)(諸本「人の但し昌平坂本は人に」) | 以下校異の記載様式は群書類従本を底本と |
|-------------------------|-------------------------|-------------------------|------------------|---------------------------------|-------------------------|----------------------|-------------------------|-----------------------------|---------------------|

| | | | | | | | | | |
|---|------|---|------|---|-----|-----|---|-----|---|
| | (11) | | (10) | | (9) | (8) | | (7) | |
| る | を | も | み | さ | 桜 | 花 | 人 | わ | し |
| ふ | る | お | な | か | に | の | し | れ | て |
| し | な | う | そ | や | も | ち | な | よ | そ |
| み | み | む | こ | ま | 枝 | る | け | り | 右 |
| る | の | 山 | に | ひ | さ | 下 | れ | も | 傍 |
| 山 | う | 吹 | し | せ | し | 行 | ば | 櫻 | に |
| 吹 | し | の | づ | り | か | 水 | (| ぞ | 乙 |
| の | ろ | 花 | め | (| は | の | 全 | 花 | 本 |
| 花 | め | (| る | 三 | す | そ |) | を | の |
| (| た | 全 | 枝 | 月 | も | こ | | お | 校 |
| 全 | さ |) | の | 一 | な | み | | し | 畧 |
|) | に | | し | | れ | れ | | む | を |
| | め | | づ | | ば | ば | | べ | 示 |
| | も | | く | | 空 | (| | き | す |
| | か | | に | | さ | 全 | | 枝 | こ |
| | れ | | は | | へ |) | | を | と |
| | ず | | ぬ | | け | | | し | に |
| | た | | る | | さ | | | 忍 | す |
| | ち | | と | | は | | | ぶ | る |
| | | | | | | | | | 。 |

(12) 立かへり^る春思ふだにあるものを^に君をさへけ

ふ待くらし^{サイ}つる（今）

(13) 雪の色を^たぬすみてさける卯花は^{さらで}さしてや人

に疑がはるうん（四月）（詞花集入）

(14) ほとぎすをのがね覺の初声にまつ人さへ

ぞ^もおどろかれぬる（今）

(15) 秋来ては思ひ^{ナシ}な^{ナシ}あへそと思へば^ハや風をとづ

れて暮かゝるらん（七月）

(16) 秋萩を心にかけてをか^{おほも}ぎきの^{おほも}おほみあしち

をなつみてぞゆく（八月）

| | | | | | | | | | |
|---|------|----|------|---|------|----|------|----|------|
| | (21) | | (20) | | (19) | | (18) | | (17) |
| し | し | 月の | は | り | く | し | か | ま | 花 |
| を | ぐ | の | れ | も | ま | て | ず | ね | 薄 |
| ち | る | 光 | ぬ | ひ | も | も | な | き | ま |
| の | れ | なり | れ | る | な | あ | ら | つ | そ |
| た | ば | け | は | と | き | か | う | る | ほ |
| か | 夕 | れ | 残 | な | 月 | し | で | かな | の |
| ね | く | | る | く | の | つ | ふ | | い |
| ぞ | れ | | る | 也 | 老 | る | り | | と |
| (| なる | (| く | (| に | る | ぬ | (| を |
| 十 | の | 全 | ま | 九 | は | かな | る | 全 | く |
| 月 | 花 |) | も | 月 | か | (| こ |) | り |
|) | 衣 | | な |) | ら | 次 | と | | り |
| | た | | かり | | れ | 郎 | 鈴 | | か |
| | が | | け | | て | 百 | 虫 | | け |
| | そ | | り | | お | 首 | と | | て |
| | め | | 空 | | ほ |) | な | | 絶 |
| | かけ | | こ | | を | き | き | | ず |
| | | | そ | | そ | かは | | | も |
| | | | | | ど | | | | 人 |
| | | | | | と | | | | を |

| | | | | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|
| | (26) | | (25) | | (24) | | (23) | | (22) |
| 老 | い | が | く | し | 名 | み | 君 | し | い |
| ぞ | り | れ | る | と | 残 | え | が | の | か |
| さ | が | に | し | 教 | な | ぬ | 代 | 山 | は |
| は | た | し | み | へ | き | は | を | を | か |
| ら | き | に | を | が | な | る | い | そ | り |
| ざ | 人 | き | な | り | 物 | か | は | む | 涙 |
| り | も | 陀 | し | せ | と | な | ぬ | ら | の |
| け | さ | の | と | ば | や | り | に | む | し |
| る | と | 御 | も | (| 花 | と | ひ | (| ぐ |
| (| り | 国 | 更 | 厭 | を | も | ける | 十 | れ |
| 全 | の | は | に | 教 | お | (| あ | 月 | 色 |
|) | ひ | (| い | 部 | も | 祝 | や |) | な |
| | ら | 全 | は |) | は | 部 | め | | れ |
| | く |) | し | | ま | | 草 | | ば |
| | に | | み | | し | | ね | | な |
| | は | | づ | | 身 | | ね | | げ |
| | の | | 名 | | に | | ご | | き |
| | ぞ | | に | | な | | と | | お |
| | む | | な | | べ | | に | | ほ |

| | | | | | | | | | |
|------------------------------|---------------------------|-------------------|-----------------------------------|-----------------|----------------------------------|------------------------------|----------------------------------|-----------------|----------------------------------|
| この外詞書を はじめ本写本と 共通な語句をも | 以上歌のみに ついてみたので あるが、 | ひにたち休らふ と（恋部下） | (30) 心にあひの風 ほのめかせやへ すかき隙なき思 | よりおふる也け り（全） | (29) あすれ草しげ れる宿をきてみ れば思ひのき | すくも打とくる かな（恋部上） （新古今入） | (28) あしのやのし づはたおびのか たむすび心や | はあしみだにな し（全） | (27) 流れくる御法 の水にあらはれ てみつの道に |
|------------------------------|---------------------------|-------------------|-----------------------------------|-----------------|----------------------------------|------------------------------|----------------------------------|-----------------|----------------------------------|

つ例（僅か二本に限定しても）をあげるとまた多くの款をあげ得る。以上の三十首の例の中
 (1) (4) (6) (7) (8) (10) (11) (17) (19) (21) (26) (29) などは明らかに本
 写本の誤写或いは脱落と思われるものである。
 以上の諸点によつて大体本書の特色として
 の具体的本文上の内容をうかがい知ることか
 出来るのである。

(5) 国学院大学蔵「散木寄歌集」(十卷三冊本)

本写本は水野忠欽氏旧蔵本である。一面十

行で歌は一行書き。詞書は五字下げという形

をとる。小沢蘆庵の書写本。本書の題には、

「散木寄歌集」[○]とあり、「寄」[○]の字を

用いた稀な本で、「[○]」の字を入れているのは

神宮文庫乙本と同じ。本文校訂上注意すべき

は、先の巻第一といふ題の下に(一)、「朱校契沖手

寫本也。

分爲三本此本下卷私補入顯昭注九十

七首廿四張契沖本哥一首一行書しと書き入れ

てある。

(寫眞其の一)
(これは朱書)

さらに卷第九の下には

(二)

自是以下依無他本所書寫以元本校合更得

異本可再校也し

と書き入れ(これは青書)

てある。

(寫眞其の二)
またその

奥書には蘆庵自署になる、

(三)

右散木彙歌集三卷詠讀岐守美令新寫校合

畢朱如元本青私所書加也

干時安永八巳亥年正月十日

蘆庵

し

という校合のことと年記がある。(寫眞其の三)

以上の如く(一)朱書(二)青書(三)奥書と蘆庵の書き入れは本書の複雑な書写過程を示すものである。結局これと総合して考えると本文は元本にあつた朱校(契沖本)をそのまま写し、元本の八巻本を上中二冊にして題昭注九十七首を下巻として三冊本にし、さらに欠巻となつてゐる雜部二巻を補入してここに十巻三冊本の形が成立したものである。尚、本書にはこれらと別に後人が黒色にかつた朱で類従本の校合を施してゐるのが目につく。

小沢本の本文上の特色は先にも述べた題昭
 注九十七首（実は九十八首ある）を合してい
 ることである。これについての奥書は次の如
 き形で書かれてゐる。（六行書き）

ㄱ

本云

（次の頁の文献と真参照）

（其の四）

寿永二年十月七日奉

梁園教命注進之

重下給差聲了

題昭

文禄三年四月廿七日寫之題昭親之本也

こゝで「本云」とあるのは群書類従本顯昭注
 (散木集注)をいう。「永二年……顯昭」までは
 群書類従本のまゝであるが、そのあとの年記
 「文祿三年……」とあるのは誰が寫本したのか
 不明であるが顯昭の親本たることを明記して
 いる。蘆庵はこれを参照したのである。
 次に本文上の肉題にうつるが、本書は「神
 宮乙本・岸本等に共通した本文を有し、「散
 木奇歌集卷第□」の如く「卷」の字が三本にあ
 り、「神祇部」(他本は「部」なし)とあるのも三本の

みの特色である。詞書の中に部分的脱落を共
有しているのもこれら三本である。

(一) 歌と左注の脱落（本書のみでなく他本も含む）

(1) 左注「おくにあまのをぶねもとかけり」(三月)

（大野本・三手本・昌平坂本・神宮乙本も同じ。以

下大野本は大、三手本は三の如く畧して用う。）

(2) 春来ては心の松にかゝりつるふぢのはつ花

咲そめにけり（三月）
□ は脱。神乙本と二本のみ

(3) 秋はぎの下葉に月の宿らずはあけてや露の

数をしらまし（八月）（神乙と二本のみ）

(4) 「うち はへて たの む み や ま の め を つ い ら 苦

し み な き は わ か 獨 か な し (歌 歌 部)

「授 記 品 の 心 を し (次 の 歌 の 詞 書)

(右の歌と詞書脱落は神乙本・岸本本も同じ)

(5) 「難 思 光 仏 し

「人 は い さ 光 の す ぢ を し る ぞ と も 同 じ 仏 や

知 ら ば 知 る ら ん し (全) (神乙本・岸本本全じ)

(6) {左 注 7} み づ き と い ふ は つ く し の ふ の か ど で な り し

(糸 部 上) (神乙本・岸本・大・三・昌・尚の諸本同じ)

(7)

「しもつけ」

「恨みても何にかはせん花みると今朝しもつ

けぬ心せばさは（雑部下・隠題）

以上七例のうち、本写本のみの脱落は(7)の

めで書写の際書き落したものであろう。

(二) 本書のみの歌の本文で諸本と相違するもの。

この肉題についてはその数もかなり多い。

詞書まで入れると尚相当な数にのぼるか、次

にその主要な歌のみを例示する。(本書のみの

語句の相違であつても諸本にも種々異訓のあ

る場合は除外した。(底本は群書類従本)

(1) しろ妙の花の梢にめをかけていそしのみね

そにを
おなを
りぞ
わづ
らふ
(二月) (夫木抄・方代和歌集入)

(2) 桜にも枝さしかはすもなれは(三月)

(3) 夏衣たちきるけふのしらかさねしらじな人

にうらもなしとは(四月)

(4) みみくまのゝはまゆふかけてほとゝぎす鳴音
とが

かさねよいくなりとも(五月)

(5) なきつとも誰にかいはん時鳥(全)

| | | | | | | | | | |
|------|------|----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| (12) | (11) | | (10) | | (9) | (8) | (7) | | (6) |
| 秋 | 河霧 | かき | おぎ | 雲 | と | 山里 | 嬉 | ば | 時鳥 |
| か | の | み | のは | かく | を | の | し | 過 | な |
| ぜ | 煙 | だ | の | れ | ち | こ | さ | に | げ |
| の | と | る | 軒 | ゆ | に | は | の | け | き |
| 音 | み | らん | の | く | は | や | ね | る | の |
| に | え | (七 | あ | つ | 夕 | の | を | 哉 | も |
| つ | て | 月) | まり | い | 立 | え | さ | (全) | りに |
| け | た | | に | (全) | す | び | へ | | あ |
| て | つ | | 音 | (新 | う | ら | き | | か |
| ぞ | な | | づ | 古今 | し | に | け | | ず |
| う | べ | | れ | 入 | 久 | も | さ | | し |
| ち | に | | て | 集) | か | る | は | | て |
| ま | 八月 | | 人 | | た | 月 | か | | 君 |
| さ | (八 | | の | | の | の | くる | | が |
| る | 月) | | 心 | | 天 | 月 | 哉 | | ま |
| 八月 | | | を | | の | の | 一 | | つ |
| (八月) | | | そ | | か | 六 | (全) | | を |
| | | | | | ぐ | 月) | | | |
| | | | | | 山 | | | | |

(19)

ひとりぬるふせやのひまのしらむまで
サ秋の

枯葉に木葉散也 (十月)

(20)

あれはてゝむねもくもらぬ宿なればあられ

ならでほもる人もなし (十一月)

(21)

はらふの池のあしに宿る月影は (全)

(22)

君こはとほにふのこやのゆかの上にあさで

こふすま引きてこそをれ (全) (次郎百首)

(23)

君が住くした河にやみだれたる神の心も (祝部)

(24)

藤衣袖はあかしの浦なれやかへる涙ぞに

ともなき (悲歎部)

| | | | | | | | | | |
|---|------|------|------|---|------|---|------|---|------|
| | (30) | (29) | (28) | | (27) | | (26) | | (25) |
| に | の | 雲 | あ | な | み | で | 思 | 袖 | 思 |
| 風 | 笛 | 井 | ら | が | そ | 人 | ひ | の | ひ |
| や | の | に | ぬ | し | ぎ | に | き | け | き |
| ふ | 音 | て | む | つ | し | み | や | し | や |
| く | に | か | せ | る | て | え | う | き | ゑ |
| ら | 琴 | み | に | か | 衣 | ん | わ | を | し |
| ん | の | か | ふ | な | を | ナ | り | 一 | ま |
| 一 | 調 | き | る | 一 | と | 物 | し | 全 | み |
| 全 | べ | 人 | 心 | 一 | こ | と | し | | し |
| 一 | の | の | ち | 一 | そ | は | ほ | | よ |
| 一 | や | し | し | 一 | 思 | 一 | を | | の |
| 続 | か | な | て | 一 | ひ | | す | | 曙 |
| 千 | よ | ら | 悲 | 一 | し | | こ | | に |
| 載 | へ | ち | し | 一 | か | | し | | け |
| 集 | る | ば | き | 一 | 淡 | | き | | ふ |
| 入 | は | 一 | は | 一 | を | | て | | の |
| 集 | た | 一 | 一 | 一 | さ | | け | | も |
| 一 | な | 全 | 一 | 一 | へ | | ふ | | 明 |
| 一 | び | 一 | 一 | 一 | も | | ま | | 石 |
| 一 | く | 一 | 一 | 一 | 一 | | 一 | | の |
| 一 | 雲 | 一 | 一 | 一 | 一 | | 一 | | 一 |

以下、紙幅の關係で一首の中に校異二個^{以上}ある

るもの、及び一個所でもそれにより意味の異

なるものののみをあげ他は畧す。

(31) いりがたき人も^をさとりのひ^みらく^くるにはのぞむ

光ぞさはらざりける（釈教部）

(32) 誰しか^ともあはれとみえんけぬも^ぬせでやまか

たつける春のけ^はたれを（全）

(33) よものく^{世に}に法とく庭のしげきか^こと^と思へばみ

だの光成けり（全）

| | | | | | | | | | |
|--|---|--|---|---|---|--|---|--|---|
| <p>の い つ と な け れ ば (全)</p> | <p>(38) 住 吉 と き く に も か ゝ る 涙 か な あ ふ せ ま つ ま</p> | <p>ぞ お も か げ に た つ (全)</p> | <p>(37) せ た の は し の 馬 ふ み く ち め お ほ み そ こ の 涙</p> | <p>み は な が れ て ぞ ふ る (全) (次郎百首)</p> | <p>(36) ひ え の 山 そ の 大 た け は か く れ ね ど な を 水 の</p> | <p>あ し と は し た な め け ん (全)</p> | <p>(35) ま づ き て は 人 め も し ら ず あ た ら し を 何 さ ま</p> | <p>な き ま で ぬ る 袖 か な (恋部上)</p> | <p>(34) 文 み す と き く に つ け て も う た し め の は し た</p> |
|--|---|--|---|---|---|--|---|--|---|

| | | | | | | | | | |
|------|------|-----|------|-----|------|-----|------|-------|------|
| | (43) | | (42) | | (41) | | (40) | | (39) |
| ば | を | ら | こ | ど | 石 | く | 年 | に | ち |
| し | ち | で | り | む | ば | な | ふ | お | つ |
| る | こ | 人 | は | 物 | し | み | れ | も | の |
| 人 | ち | か | て | と | る | は | と | ね | ほ |
| も | の | へ | ぬ | こ | と | 面 | こ | る | き |
| あ | と | し | に | そ | か | 影 | す | 心 | と |
| ら | 山 | つ | ゑ | き | は | に | の | な | ち |
| じ | の | る | の | け | の | た | き | り | の |
| (雑部) | 裾 | | 初 | | 滝 | つ | け | せ | わ |
| | を | (全) | 雁 | (全) | も | | き | ば | た |
| | 恋 | | あ | | 結 | (全) | の | (恋部下) | そ |
| | し | | さ | | ぶ | | 絶 | | も |
| | と | | に | | て | | え | | こ |
| | も | | す | | に | | ま | | え |
| | い | | る | | し | | よ | | ぬ |
| | は | | 宿 | | ば | | り | | べ |
| | で | | に | | し | | み | | し |
| | 思 | | も | | は | | え | | そ |
| | へ | | あ | | よ | | つ | | れ |

(44) さや はさはあだにも^や人を忘れ^{ける}けりあやしや

君が心ならひに (全)

(45) 道のべのこほりが下のねっこ草^{さとなれ}さとされし

身のたへがたのよや (全)

(46) 今よりはは^{まし}嬌しがらせよをし^{まし}かへてあふさき

るさの我身と思はむ (全)

(47) かはほりのす^{すく}いたるかほとみゆるま^{かな}で (連句歌)

(48) き郷のとのふせとりにして (全・附句)

(き郷のとのの下に「は」あり)

| | | | | | | | | | |
|-----------|------|----------|----------------|--------|--------------|-----------|----------|------------------|----------------|
| 首の | 集入集の | | した歌まで | 少なくない | みの校異を調査して | 似した本文を有して | すでに述べた如く | にしほつたが四十八例にも違した。 | 以上、煩雑さを避ける意味から |
| (22) | (9) | さて、 | 例示するとその数は倍加する。 | いのである。 | みるかと必ずしもその数は | たを有して | た如く | たが四十八例にも違した。 | (31) 以降さら |
| (36) | (15) | こ | | | | | | | |
| の歌をそれ | (27) | こ | | | | | | | |
| ぐ | (30) | で | | | | | | | |
| の肉係歌書でみると | (二) | 一つ | | | | | | | |
| | 夫木抄の | の手がかりとして | | | | | | | |
| | (1) | かりとして | | | | | | | |
| | (三) | (一) 勅撰 | | | | | | | |
| | 次郎百 | | | | | | | | |

小沢本のような訓みにはなつていない。先に
 示した小沢本校異は誤寫であることがこれら
 のことによつて知られる。これらから類推し
 て誤寫と思われゐる歌に (4) (5) (6) (29) (31) があ
 り、明
 らかに脱落と思われゐる歌に (15) (16) (26) (39) (42) 等があ
 る。また一方歌の意味からみて本寫本の方が
 正しいと思われゐるものもある。(25) (32) (34) の歌の如
 き) しかし、全般的にみて本寫本には歌の本
 文はもとより詞書の本文にもかなり誤寫、脱
 落などの異變があり善本とはいわれな
 い。以

上のことが小沢本の内容としての本文久留で
ある。

(6) 国会図書館上野分館蔵

「散木奇歌集」(十卷五冊)

本写本は岸本由豆流(寛政元—弘化三・58_オ没)

の旧蔵本である。合綴改装の表紙には「散木

奇歌集」^ロとあるが、旧装の表紙は「散木奇歌集」^リとあり各巻とも「奇」^リを用いている。奥

書がないのでその書写過程は明らかでないが

江戸末期のものであろう。(南根慶子氏説に従

う。）本文としては校合もなされ「イ本」の書
入もみえるが諸本の中にあつては最も粗悪本
である。

本文上 岸本本の大きな欠陥は部分的脱落も
多いが、まず詞書、歌などの欠けているのが
目につく。それらとあけると次の通り。

(1) 毎夜待郭公

時鳥よごろ心をつくさせて今日ぞかすかに
ほのめかしつる（五月）

(2) いしゐつゝ隙もる水にたはぶれてつてにも

夏を聞わたる哉^L（六月）

百首歌中に泉をよめる^L（次の歌の詞書）

(3) くる人もなき山里はかやり火のくゆる烟ぞ

友となりける（全）（神乙本も同じく欠く）

(4)

あひ^っ八日人のもとへつかはしける^L
にかすべかりける^L（七月）（詞書と歌）
あひ見てはたちもはなれぬ心をぞ^L七夕つめ

(5)

「思ひがたき先といへる事をよめる^L」

そのほどゝ思ひ難きはよもの海にそこひも

しらぬ心成けり^L（歌教部）（詞書と歌）

但し歌は神甲乙
小沢・昌・尚各本
も欠く

(6)

「諸の花くさぐさにさきみだるといへる事をよめる」

「そこはくの花のひもとく庭の面にをしのけ

たるははちす也けり」(全)

(神宮甲乙本・小・昌・尚も同じく欠く)
の諸本

(7)

左注「みづきといふはつくしのふのかどでなり」(恋部上)

(神甲乙・小・大・三・昌・尚の諸本同じく欠く)

「懷旧」

(8)

「恋しともいはでぞ思ふたまきはる立かへ

るべき昔ならねば」(雑部)(詞書と歌)

(9)

「家道朝臣」(かへしの作者名)(全)

| | | | | | | | | | |
|--|--|--|------------------------------------|--|--------------------------------------|----------------------------|--|--|---|
| ろ う。 以上が 本写本の 根本的欠 陥である が、 | 例が ない。 これは書 写の際の 書き落と しであ | かも (9)・ (12)が 作者名の 脱落であ ること は他本に | 他の十 例が本写 本のみの 脱落であ る。し | 以上 のうち (6)・ (7)は他 本にも共 有する欠 歌で | (12)「 作者「安 芸守重基 」の名 (連歌) | さつを のたゆみ なのよや (全) | (11)し みづ山な うのまし ばにかざ れてねら ふ | なき身 をいかに せん (雑部・ 恨躬耻運 雑歌百首) | (10)ふ しつけし をどろの 下にすむ はえの心 おさ |
|--|--|--|------------------------------------|--|--------------------------------------|----------------------------|--|--|---|

次に本書のみのもつ部分的相違もかなり多

いのでその校異を示す。(但し、詞書は省略。

歌の本文も他本との共存の場合はこれを除外

した。

(1) たぐひなき心ひろさをかたみにて……(正月)

(2) おいらくの腰ふたへなる身なれども……(全)

(3) 妹背山谷ふところにおひたちて……(二月)

(4) 桜花をのがもろさのゆふばへに心をさへも

ちらしつるかな(全)

(5) 花のちる下行水のそこみれば……(全)

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|--|---|--|---|--|---|--|
| <p>の か た み と 思 へ ば (全)</p> | <p>(10) い と く し く み る 空 ぞ な き 梅 は な わ か れ し 春</p> | <p>ぞ 春 は 恋 し き (三月)(続古今入集)</p> | <p>(9) 桜 だ に 散 の こ ら ば と い ひ し か ど 花 見 て し も</p> | <p>れ か た み と も み ん (全)</p> | <p>(8) 春 こ そ は か ぎ り も あ ら め み よ し の に 霞 は 残</p> | <p>お ふ し み る 山 吹 の 花 (全)</p> | <p>(7) を る な み の う し ろ め た さ に め も か れ ず た ち</p> | <p>さ へ も 思 ひ た つ 哉 (全)</p> | <p>(6) あ ぢ き な や 小 山 田 を こ そ か へ し つ れ 雁 が ね</p> |
|---|---|---|--|---|--|---|--|---|--|

待をのね山

(11) 時雨をのね山のしるしに
(一)五月(夫木抄入)

(12) これきかむこせのさ^はやまの杉が上^{くれ}に雨もし

のゝにくきら鳴也
(全)(夫木抄入)

(13) 人はいさわれはよひよりあふ^は岐の夕つけ鳥

のねをのみぞなく
(全)

(14) み垣もる^り衛士の玉えにおりたちてひけばあ

やめのねも^{もはるかなりけり}はるかなり
(全)

(15) 五月雨はふるからをのゝ忘水をしひたすら

のぬま^{沼とこそみる}えとぞみる
(全)(金葉集初度本入集)

(16) さみだれはもりこし水も^に岩こえて庭もぬま

| | | | | | | | | | |
|--------------------------------|-----------------------------------|--|-----------------------|---|--|--|--|--|---|
| <p>(以下一首にニつ以上の校異あるもののみを示す)</p> | <p>み^もとのひましらむまで (全)</p> | <p>(27) 誰^かし^かも^と水難ならではたゝくべきくろとの</p> | <p>で此世に跡をとめまし (全)</p> | <p>(26) うつせみのいでからくても^{てぞ}すぐすかな^{とふ}いか</p> | <p>(25) 夏の日も――氷室ぞ冬のかたみ成^{けり}ける (全)</p> | <p>(24) さ^さえ^しこ^のほ^ぼる^ることを氷室に残しをきて―― (全)</p> | <p>も^さお^しも^のひ^ぼける^る哉 (全)</p> | <p>(23) せく手には涼しき事も^{とよ}よ^もど^もみ^へけ^どり^も水音のみ</p> | <p>に^とお^おも^もむ^むき^きぬべし (全)</p> |
|--------------------------------|-----------------------------------|--|-----------------------|---|--|--|--|--|---|

| | | | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|-----|------|-----|------|
| | (32) | | (31) | | (30) | | (29) | | (28) |
| をに | 秋 | ん | 秋 | や | さ | り | 山 | に | く |
| そ | 萩 | む | き | 鴈 | は | す | が | た | み |
| め | も | っ | て | に | へ | が | つ | く | な |
| か | 露 | か | は | っ | な | み | の | お | に |
| へく | の | し | 風 | く | る | い | す | り | も |
| す | し | の | ひ | ら | 螢 | く | と | も | た |
| らん | が | 世 | や | 人 | も | に | か | こ | い |
| (八月) | ら | や | かな | (全) | 風 | (全) | た | ら | は |
| | み | (七月) | なる | (これは | には | | け | あ | か |
| | かけて | (次郎 | 暮 | 脱 | は | | が | れ | ら |
| | けり | 郎 | も | 落 | ら | | き | (全) | れ |
| | いく | 百 | あ | の | れて | | 枝 | | よ |
| | し | 首) | り | 例 | 今日 | | も | | す |
| | ほ | | 暑 | | を | | せ | | ま |
| | 庭 | | さ | | 秋 | | に | | ま |
| | には | | し | | と | | 夕 | | こ |
| | | | め | | | | 顔 | | と |
| | | | ら | | | | な | | |
| | | | し | | | | れ | | |

| | | | | | | | | | |
|--------|------|-----|------|------|------|-----|------|-----|------|
| | (37) | | (36) | | (35) | | (34) | | (33) |
| し | あ | の | う | て | て | る | 河 | 鹿 | ま |
| き | け | 物 | つ | た | る | む | 霧 | の | ぶ |
| よ | に | に | ろ | る | け | ろ | の | 鳴 | し |
| お | と | を | へ | 我 | を | の | 煙 | か | さ |
| も | も | 有 | る | 身 | み | ハ | と | は | す |
| が | な | け | 色 | と | る | 島 | み | す | さ |
| は | ほ | る | を | 思 | 空 | に | え | ら | つ |
| り | 秋 | (全) | ば | へ | ぞ | は | て | ん | ま |
| す | 風 | | 霜 | ば | な | (全) | た | (全) | つ |
| な | は | | 雪 | (九月) | き | | な | | ほ |
| (全) | を | | の | | 雲 | | へ | | の |
| (4載入集) | と | | へ | | の | | ん | | 笛 |
| | づ | | だ | | う | | な | | の |
| | れ | | つ | | へ | | み | | 声 |
| | て | | れ | | に | | わ | | ぞ |
| | 野 | | ど | | こ | こ | け | | と |
| | べ | | ば | | と | た | か | | も |
| | の | | 香 | | へ | | へ | | し |
| | け | | は | | た | | | | ら |
| | | | 我 | | | | | | で |
| | | | 袖 | | | | | | や |

(43)

を と に 聞 か ね の み さ き は つ き も せ ず な く 声

ひ い く

渡 り

也 け り

(悲 歎 部)

(44)

た が た め に 求 て え け り

法 な れ ば け ふ ま で こ

ナレ (神乙・小沢本も同じ)

の 身

か ず に

も り け ん

(釈 教 部)

(45)

若 草 を た い 飯 そ め に 見 し ひ よ り つ か ね も あ

へ ぬ 物 を こ そ 思 へ

(恋 部 上)

あ は か ね

(46)

君 こ ふ と の の か る 藻 よ り ね 覚 し て あ み け る

を

ぬ た に や つ れ て ぞ

み る

(全)

わ

(47)

我 を 君 に の ま っ に

す が し ま の こ と を な つ み

の う し め け ん

(全)

(48)

我恋はおぼろの清水いはこえてせきやるか

たもなくて暮しつ(全)(金葉集二度本入集)

(49)

ひひくにゆくことくるはしかへしぞききみきに(連歌附句)

(50)

須臾も心のなぐさむばかりた(小決本同じ)(全附句)

以上本写本における校異、それも(28)以後は

一首に二個以上の校異を有するもののを対象

として五十の諸例を抜き出した。この外、詞

書を始め歌の本文の校異一例の場合、また他

本との共通の校異ということになるとその教

はこれ位のものではなものである。

これらの調査の結果からみて本書にはかな

りの脱稿と謄写とを有していることが指摘さ

れる。例えば以上の中にはあげなかつたが、

詞書について一つの例を示すと、九州の赤間

（現在、福岡県宗^{おなかつた}像郡赤間町）で詠人だ歌に

「君こふとささふる袖はあかまにて海にしら

れぬ浪ぞ立ける」とあるがその詞書は「あか

田」といふ所にてとなつている。歌の本文の方

では「赤間」と正しい地名になつているのに

詞書は誤まつてゐる。(これは本写本のみの誤

謬)「あか田」という地名はむろんないのである。

その他、以上の諸例のうち(一)脱落は(10)(18)(30)

(43)(44)(48)(50)(尤もこの中(44)の脱落は他本にもあ

るが)等であり、(二)明うかに謄写と思われるのは

(6)(9)(19)(24)(25)(31)(32)(33)(34)(37)(45)(46)(47)(49)等であらう。

またこの他にもあることが推測されるのである

り、岸本本は善本とはいはれない。

(7) 内閣文庫蔵「散木弁歌集」(八卷二冊)

本写本は昌平坂學問所旧蔵本である。一丁十行で款は一行書きであるが結句の下部が二

行に亘っている。奥書を有しないのでその書

写過程は明らかでないがその特色としては、

(一)、本文には書名はないが墨と朱を以て校合

を加えている。

(二)、一度書いた本文の語句を消してその右横

に他本の語句を書きかえた跡をのこしている。

この点本文としては純粋性を欠いているといふべきである。

(三)、散木集から勅撰入集の歌の上に夫々の勅

撰集名を記入している。

(四)、雑部以下二巻が欠巻である。

(五)、「散木弁歌集」と「弁」の字を用いている少

ない本の一つである。

(左に校異などの記入個所の文献写真を

示す。)

この校異の書き入れは、何れも群書類従本系

統との対校である。その書き入れ方法は、

(一) 紅葉^のを^ばの如く挿入の形をとつたもの。

(二) さびし^{きく}の如くみせけちの形をとつたも

の。

(三) 成ぬ^ちる^り也^{なり}の杜の成行^{ちり}みれば^{なり}の如

く只右側に示してゐるもの。

(四) 玉葉^しとあるのは玉葉集^し入撰を表示した

書き入れである。(校異ではないが)

以上の如くその書き入れは必ずしも統一し

ていない。そこに書寫者の私意の加わった点

などみうけられ寫本としての純度が稀薄にな

つてくるのである。

次に本寫本の本文上の特色をあげておく。

まず大きな脱落としては次のものが指摘され

る。(他本と普通のものも含む)

(1) 吉野山みねの楠はたかけれど今朝は霞にう

づもれにけり(正月)

(2) 左注「はしがきにさとをばかれずとかけり」

(大野本・三手本同じく欠く)

(三月)

(3) 「返し」(春のゝちは君かなげきに……)の題詞

(二月) (神宮甲本も全じく欠く)

もろともに今ぞ鳴なるほとゝぎす 八声の鳥

(4) はそのがつまかは (五月) (神宮甲本も欠く)

(5) 「返し」

「人はいさわれはよひよりあふ坂の夕つけ

鳥のねそのみぞなく」(全)(題と歌共に欠く)

(6) 詞書「秋の山を月をみるといへる事をよめ

る」(九月)

(神宮甲乙本、小沢本、岸本本も欠く)

(7) 題詞「かへしし及びその下^(の)に作者名「加賀守」

なし、(別離)

(8) 題詞「かへししはあるが、その作者名「経兼」

なし、(今)(神宮乙本、小沢本、三手本も同じ)

(9) 涙をば硯の水にせきれつ、胸をやくともか

(9) くみのりかな(悲歎部)

(10) 思ふこと三のおしへをとりのへてはすの初

花みるよしもがなし(歌教部)

及びその次の歌の詞書「その蓮には戒を

たもちたる人なんむまるといふ事を」

(11) 左注「みづきといふはつくしのふのかどでな

り^L（恋部上）（神甲乙、小沢、岸本、大野、三、尚舎の各本同じ）

(12) 題詞「海路恋^L（恋部下）（神甲乙、小、岸、大、三、尚の各本同じ）

(13) 浅からず思へばこそはほめかせほりかね

の井のつゝましき身を（全）

(14) 題詞「大感長実の八條家にて恋の心を^L（全）

(15) 作者名「ゆりはな^L（神祇）（尚宮本同じ）

(16) 人はいさ光のすぢをしるぞとおなじ仏や

しらばしるらん（釈教）（神甲本も同じ）

以上十六例のうち本写本のみの脱落は (1) (5)

(7) (9) (10) (13) (14) で、他は諸本共通の脱落。本書のみ

の脱落は書写の時の書落としであろう。

次には本書に於ける主な部分的語句の相違

のみの校異をあげておく。(詞書と他本との共

通のものには省畧。但し歌については^{他本でも}關係あるものは校異を

示しておいた。)

(1) 子日してよはひをのべに雪ふれば^ど……(正月)

(2) 鶯は春待ちつけていつしかの杜のたま^{たまへ}に

こゑならず也 (全)

(3) や^かざし^しきな^なのしとねにちりそむる……(二月)

| | | | | | | | | | |
|--------------|-------------------------|-----------------|-------------------------|---|--|-------------|--------------------------|--------------|---|
| きめもぞきたなき（八月） | (8) 咲そむる萩たちかくせ女郎花しのゝをすゝ | 身をもなづけるけふかな（六月） | (7) さばへなるあさぢをかりに人なして厭ひし | れ <small>（多し）</small> ばく <small>（諸本）</small> るにや有うん（五月） | (6) あふ事は <small>（を）</small> し <small>（も）</small> の底の今宵し <small>（も）</small> めを <small>（も）</small> みせつ <small>（尚・大も）</small> | みも葵かけたり（四月） | (5) けふくればしどろにみゆる山賤のおどろのか | ゐに種もかしける（三月） | (4) 秋刈りしむろのをしねを思ひ出て春ぞ <small>（を）</small> たな |
|--------------|-------------------------|-----------------|-------------------------|---|--|-------------|--------------------------|--------------|---|

(9)

そのはらやふせやに思ふさをしかも……(全)

(10)

吹風にあたりの空をほらはせてひとりもある

む(岸・神甲乙・小も)

中ぶ秋の月かな

(全)

(11)

てる月のたびねのとこやしもといふかつら

風

き山の谷のかほ水(九月)(千載集入歌)

(12)

いはばかり秋の名残をながめましけさは木

すな(神甲本も)

のはに時雨降すは(十月)(千載集入歌)

は(諸本多し)

(13)

時雨するはしたの山のもみち葉の色づくほ

なこそ

13

どのなになそ有けれ(全)

| | | | | | | | | | |
|--------------------------|---------------|---------------------------|-------------|---------------------------|---------------|---------------------------|---|--------------------------|-------------|
| (14) 炭がまの口あけつればいはずともひをへて | もまたおこす計ぞ（十二月） | (15) 雪ふれば青草の山もみたくれてときはのなを | やけさはおるうん（全） | (16) いといたしくしどろにみゆるかるかやのうれ | もとろはにふれる白雪（全） | (17) そま河をたれそのかみにせき初めて（祝部） | (18) かすが山いはねに……いく 万代 <small>（神甲也）</small> のしるし成らん（全） | (19) あおよりもあをくそめなす色もあれば千年 | の宿に万代をませ（全） |
|--------------------------|---------------|---------------------------|-------------|---------------------------|---------------|---------------------------|---|--------------------------|-------------|

20 まるのくまはなつ日ぐれは別るともしづの

みなはにあはざらめやは(全)

(21) 今はとてかへる心はまどへどもむまこそ道

はたどらざりけれ(悲歎部)

(22) 名にしおはいしらじなわだの都鳥心づくし

のかたはそことも(全)

(23) 止めよとしろくいへども折ふしのあしわけ

にても過しつる哉(全)

(24) なきながす袂にかけばあやめ草ねもすみぞ

めにうつれと思ふ(全)

(25)

おひたちし程をしらずはかりにても草の庵

に宿うましざらましやは(釈教)

(26)

へだてなき弥陀の光につみ人の心のくまぞこそいまの

さはり成ける(全)

(27)

誓ひをきてみちびく人の隙なきナシに光もたえ

ぬ物にぞ有ける(全)

(28)

さいがにのいとさる身ほとはならずともしは

しかきつく方をしらばや(全)

(29)

み空にも吹かよふうん(諸本多し)うしおほくちのまかみか

糸のこのした風はナシ(全)

(30)

文
み
す
と
き
く
に
つ
け
て
も
う
た
し
め
の
は
し
た

な
き
ま
で
ぬ
る
袖
か
な
(恋部上)

(31)

春
た
く
れ
ば
め
ぐ
む
垣
ね
の
み
や
つ
こ
き
ー
ー
(全)

(32)

水
の
海
と
お
つ
る
涙
は
成
に
け
り
あ
ふ
べ
き
し
ほ

も
な
き
と
き
く
よ
り
(全)

(33)

我
袖
を
ひ
ぢ
が
さ
雨
に
そ
ぼ
ぬ
れ
て
さ
ほ
す
と
い

も
(諸本多し)

さ
ほ
と
は

は
ん
君
□
ぞ
お
こ
る
(全)

(34)

他
つ
も
頼
め
だ
に
せ
よ
恋
し
な
ん
後
の
世
ま
で

も
と
慰
め
に
せ
ん
(恋部下)

(35)

| | | |
|-----|---|---|
| い | い | よ |
| ひ | ひ | の |
| そ | し | 人 |
| し | は | は |
| ば | と | と |
| し | ひ | 慕 |
| も | ふ | と |
| う | も | す |
| さ | ま | ざ |
| じ | ら | ば |
| (全) | み | き |
| | と | な |
| | て | |

(36)

| | | |
|-----|-----|---------|
| 思 | 思 | ひ |
| 草 | 草 | は |
| は | は | ず |
| ゑ | ゑ | に |
| 結 | 結 | ぶ |
| 白 | 白 | 露 |
| の | の | た |
| ま | ま | く |
| き | き | て |
| は | は | も |
| (全) | (全) | (金葉集入歌) |

以上本写本から三十六の校異を抜き出した。

調査の結果から考えられることは群書類従本

と対校して本写本独自の語句の相違は筆外少

ないといふことであつた。以上のほかにい

ゆる大野本系統の諸本と共通した校異を加

えると実におびただしに数に上るが、それは
一印省略した。(一首の中に本写本独自のもの
があり同じ歌に他本と共通するものがある場
合のみ参考に示した。)以上のうち部分的脱落
は(18)(27)(29)の三個所で、千載集入歌の
訓になつてゐる。本書は校合書き入れも多い
のであるが、先にも述べた如く私意を以て加
えられた節もみえ本文内容としては多少純粋
性を欠く面がある。以上のことなどが本写本
の特色といえる。

(8)

国会図書館上野分館蔵

「散木弁歌集」(八卷二冊)

本写本にも奥書はない。歌集に「弁」の字

を用いた一冊である。「尚舎」「源忠房」の

印がある。本文としては昌平坂本(内閣文庫

蔵)に近い図像にあり、本書自体としての特

色はない。奥書を有していないのでその書写

過程も不明。昌平坂本に近いとはいうもの、

昌平坂本の如き歌の脱落もないのであつて、

次に本書の脱落と（他本をも含む）みると

左の通り。

(1) 諸の花くさぐさにさきみだると

いへる事をよめる

そこばくの花のひもとく庭の面にをしのけ

たるははちす也けり（釈教）（詞書と歌）

（右を久くのは神甲乙・小沢・岸本・昌平坂の各諸本）

(2) 左注「みづきといふはつくしのふのかどで

なりし（恋部上）

(右を欠くのは神甲乙、小沢本、岸本、大野、三手

・昌平坂の各諸本)

(3) 題詞「海路恋」(恋部下)

(右を欠くのは神甲乙、小沢、岸本、大野、三手、昌

平坂の各諸本)

(4) 「紅の袖にはづれしまみよりもなれがつり

りのわらけをぞ思ふ」(恋部下)

及び、その次の歌の詞書「修理大夫題本

の六條の家にて恋不知程といへることとを

よめる」を欠く。

（右の致と詞書を欠くのは昌平坂本）
以上四つの脱落はいずれも本書のみの特色ではなく、いずれも他の諸本と共通した脱落であり、最も近い関係にある昌平坂本よりも脱落は少ない。こうしたことから部分的な語句の異同も大方他本と共通しており、本書自体の特色はない。従ってこれまでの諸本の如き部分的小異の例は省略する。要は、本写本は、大野本系統本に位置づけられるが本文としては独自の特色をもたない本といえるのである。

一丁十三行。款は一行書きで奥書がある。

今、伝本に關する部分の奥書を示すと次の通

り。

本云

仁平四年正月十九日未時殊以彼家自

筆本書寫了一校了（中畧）

宝治元年九月廿七日於燈本令書寫訖此本

者故顯昭法橋自筆云々片仮名横切一帖厚

雙紙也。披閱之間依有煩書分三帖了。但顯

昭文書等讓與弟子印雅々々同宿故幸清法

印房終焉之時印雅讓幸清々々入滅之後故

超清法印伝得超清持両妻之間彼是相爭散

々云々。不慮之外伝備件本書寫了。但日

々無余暇夜々勵筆功仍筆跡狼籍可察老眼

也。

六旬有余翁 在判

右之奥書者或本ニ載之仍テ此書加了

寛文十七十九

レ

とある。これによると本書の原本は仁平四

年正月十九日、俊頼の自筆本から書寫したも

のか、或いはまたその転写本を寛文十年に書

写したといふことになるのである。さすれば
本写本は原本からいえば孫本といふ極めて近
い関係にある貴重な散木集の本文といふこと
にもなるのである。但し、この奥書の「宝治
元年……」以下は原本にあつたものではなくこ
の書写者が寛文十年に書き加えたものである。
この追加奥書により題「昭自筆本なるもの
存在が知られるのは注意すべきであるが、今
日この自筆本又はその転写本も見ることとは出
来ない。この書写者は「宝治元年……」以下

奥書を寛文十年書写するに当たり「或本」に
 載つていたのを書き加えたのである。以上の
 如く本写本の書写過程は（俊頼）自筆本の孫本にあた
 り、また一方題詠自筆本もあつたらしいがい
 ずれにしても多くの散本集の諸本に比してそ
 の書写階梯の極めて少ない本である。
 次に、書陵部本の本文についてであるが「
 神祇」の部に八首の脱落のあるのが一つの特
 色である。その外は欠款もなく詞書にも脱落

はなく最もすぐれた江戸初期になつた写本と

いうことが出来る。

「神祇」の部は散本集中歌数が僅か21首で最

も少ない。脱落歌はその後半部のところには8

首ある。それを示すと次の通り。

(1) 「左京大夫経忠の家にて社櫻といへることを」

けふみれば花もすきふに成にけり風はいな

りにふくとみれども

(2) 「前斎宮の閑院におはしましける頃月のあか

りける夜まゝりてみれば……(以下畧)

(5)

き
さ
ら
ぎ
の
は
つ
さ
る
な
れ
や
春
日
山
み
ね
ど
よ

春日祭

の
ね
ぐ
ら
成
け
り

(4)

神
葉
を
神
の
み
む
ろ
と
あ
が
む
れ
ば
ゆ
ふ
つ
け
鳥

神
を
よ
め
る

に
ゆ
き
て
い
の
う
ば

(3)

あ
ま
く
た
る
神
も
し
る
ら
ん
思
ふ
こ
と
空
し
き
杜

か
へ
し

ゆ
り
は
な

の
は
よ
い
か
に
ぞ
や

思
ひ
か
ね
社
も
み
え
ぬ
杜
に
来
て
い
の
り
し
こ
と

むまでいたゞきまつる

加茂祭

(6) 引つれて渡るけしきを来てみればいつきて

神のかざり成ける

福荷にまいりたる人の杉をこひければ――(以下畧)

(7) 人しれずいなりの神に祈るらんしるしの杉

と思ふばかりぞ

返し扇のつまにかけり

(8) 君をとはいなりの神に祈らねばしるしの杉

の姦しげもなし

（次の歌の詞書の中途まで脱落）

この脱落について南根慶子氏は「落丁ではなく一丁の表と裏との間に存するのである。

故にこれは原本仁平本の落丁か又は図書寮本

の書写者が元本の紙を二枚重ねてめくつた爲

か何れかであろう。」「散木奇歌集の研究と

校本^{L.P.6}）と言われている。おそらくそうである

ろう。尚本写本には散木集の後に「基俊集^L

の大部分を加えて同冊としている。大部とい

つたのは類徒本の「追考出^L（歌員14首）がな

| | | | | | | | | | |
|--|--|--|--|--|---|--|--|--|---|
| の で あ る。 内 俵 の な い 「 基 俊 集 」 が 合 冊 さ れ た 経 | 俊 頼 の 散 木 集 と は 内 容 的 に は 全 く 関 係 は な い | 。 こ れ は ま さ し く 乱 丁 と も い う べ き で あ り、 | 俊 家 集 」 の 本 文 の 巻 頭 題 詞 か ら 始 ま つ て い る | 基 俊 家 集 」 と い う 標 題 も な く、 い き な り「 基 | 本 文 も 類 従 本 と 全 く 同 じ で あ る。 し か し、 | ま で の 歟 が 全 部 同 冊 と な つ て い る の で あ つ て | み ま ほ し き 波 ま な る 沖 つ 小 じ ま の 浜 楸 か な し | も と に つ か は し け る 」 か ら「 君 と い へ ば な ど | い だ け で 後 は「 基 俊 集 」 の 巻 頭「 正 月 朔 日 女 の |
|--|--|--|--|--|---|--|--|--|---|

緯について若干述べておく。

書陵部には四本の基俊集が所蔵されている

が、その甲の二本は先にふれた散木集合冊の

部分の最後「君といへば……」の歌の次に、左

の如き奥書をはさみ込んでいる。

「茲散木集貳冊目儂洞新本謄写出后毎輪直

依禁裏古本校正焉蓋自正月一日基俊家集

也。夫俊頼基俊之二士同世而生同道而立

其名鳴于一時其統伝于万古可謂侔歌之仙

矣。今合二集為全書聊欲有助觀覽而已

戊寅臘月七日

藤譚玄_レ

以後歌はまたつづけているが、藤譚玄なる

人は、俊賴・基俊の時代を等しくする二歌人

の歌を一冊の全書として観覧の一助にしよう

と試みたのである。ところかその後この奥書

などの脱落した写本もあつてその間の事情も

不明のまゝ遂に基俊家集が散本集の中に入り

込んでしまつたものであろう。それに今一つ

竹柏園藏に「散本集脱漏」といふ一本あり、

これにはやはり先の基俊集の部分が所収され

同じく譚玄の奥書が別紙に貼付けてあるところから、これを真実の「散木集脱漏」と誤解される面もあつて寛文十年の書写者も不審とは思いつゝ書き加えて現在見る如き乱丁が起つたのであらう。このことは散木集内容には何ら關係は有しないが写本形態の上から書陵部本「散木奇歌集」の他に見られない特色といふことが出来る。

次に本写本のみの歌の本文校異を示すと左の通り。(詞書は省畧)

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|--|-----|--|-----|--|--|--|-----|--|--|------------------------------------|-----|---|-----|---|--|--|-----|---|
| (7) | 難 し か も 水 難 な ら で は た ゝ く べ き く ろ と の ひ | (6) | ほ と ゝ ぎ す 末 の 松 山 風 ふ け は ―― (全) | (5) | 紫 の 庵 に 雨 宿 り せ よ ―― お な じ 梢 ぞ (五月) | | そ は い は を こ え し か (四月) (千載集入集) | (4) | 卯 花 よ い で こ と く し か け し ま の 浪 も さ こ | | 散 ま が ふ ら ん (三月) | (3) | か ぞ ふ れ ば 春 も 梢 に 成 に け り 花 と ゝ も に や | (2) | き く と い へ ば や へ や は さ か ね 桜 花 ―― (二月) | | に ほ ひ き つ る と (正月) (新古今入集) | (1) | 心 あ ら ば と は ま し 物 を 梅 の 花 た が 里 よ り か |
|-----|--|-----|--|-----|--|--|--|-----|--|--|------------------------------------|-----|---|-----|---|--|--|-----|---|

ましむまで

(六月)

(8)

タされば野べもや物を思ふらん……露じめりけりセリ (八月)

(9)

秋の田のあぜふみしだきなく底はいなむし

ふをやしき思らん

(全)

(10)

衣うつきぬたの音に夢覺てことぞともなく

ぬる袖かな

(全)

(11)

にぎりなきみの月に月のやどらずばいかであ

さぢの数をしらまし

(九月)

(12)

君が代はおほはつせぢのもゝえつきもゝえ

ながらもさかへますかな

(全)

(13)

たちかへる都にたにも引かへてうしと思ふ

事なかましかば

(14)

住吉の千木の
かたそぎ
ゆきふきは
て霜をき

| | |
|---|---|
| 木 | ま |
| よ | が |
| ふ | ふ |
| 冬 | |
| は | |
| き | |
| に | |
| け | |
| り | |
| (| |
| 神 | |
| 祇 | |
|) | |
| (| |
| 新 | |
| 後 | |
| 拾 | |
| 遺 | |
| 入 | |
| 集 | |
|) | |

(15)

いとくきどの玉江の光るを――
(歌教)

(16)

た
か
た
め
の
な
を
ず
り
こ
と
に
あ
み
た
仙
と
い
ふ
（
今
）

(17)

お
か
み
河
ね
し
ろ
た
か
か
や
ふ
み
し
た
き
ー
ー
ー
(悪部下)

(18)

身の程をもて宴せども君みてはめでもやす

るとあざれをぞする
(全)

(19)

なく涙おそふる袖は
……色ごのみとやんは見るうん
(全)

(20)

しぐち引くあこ

のは山

はまゆ

に年ふりて……(雑部上)

(21)

よし野川

岩のおせきをわきか

へりしらゆふ

玉水(大・三・岸・小・鳥丸各諸本も)

花や瀧の白玉

(全)

(22)

嬉しさをきか

する程はこゝの

つゆの……(全)

(23)

春風になど

やおりけん

みちのくのまがきが

なみ(大・三・小・岸の諸本も)

の

島の梅の花貝

(全)

(24)

燕丹が深意を

尽せばそ樊籠期も

首を蘇よけ

を

む

(全)

(25)

たみ置く

いは間をすぐる

決河おびたがし

もたぎるなるかな

らん

(全)

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------------------------------------|------|---|------|---|------|--|------|---|------|--|------|--|--|--------------------|------|---|------|---------------------------|
| (34) | 祝 ひをきし 思ひの如くしめのうち に……(祝部) | (33) | く ぼたも に かくやく ぼ <small>ナシ(間宮本・岸本本も)</small> ならざらむ | (32) | し ぐれも うやとかほに かゝれる <small>ば</small> | (31) | 論議をば みそひしをにぞ したりける <small>ナシ</small> | (30) | う か <small>ナシ</small> うめ はうかれて宿もさだめ ぬか | (29) | あ らう <small>ふ</small> と みれ <small>ど(小岸も)</small> ばくろきとりかな | (28) | こ のつ のち <small>み</small> の 声遠くきこゆなり (連歌) | | と思ひけるかな (全) | (27) | あ やまたぬ花の都を らのれからうき京なり <small>なる</small> | (26) | 何事の忍びがた きに初雁の—— (全) |
|------|------------------------------------|------|---|------|---|------|--|------|---|------|--|------|--|--|--------------------|------|---|------|---------------------------|

以上類従本を底本としての校異三十四個所
 を示したのであるが、これに諸本共通の詞書
 ・歌の本文の校異を加えると更にその数は多
 くなる。先に見た全体的脱落歌が八首あり、
 これは落丁ではない。今部令的小異を抜き出し
 て言えることは、(一)本寫本に若干の脱字のある
 ことである。(11)(31)(10)(12)(21)(24)(30)(31)(33)の九例がそ
 うであり、(二)、歌の意味から誤字と思われるも
 のに(7)(15)(18)の三例がある。本寫本の形態的特
 色は勅撰入集歌について、は上に勅撰集名を記

に つ い て は 以 上 の よ う な 形 で 示 し て い る 。

要 する に 、 書 陵 部 本 は 仁 平 本 の 孫 本 と し て

他 の 諸 本 に み る よ う な 歌 の 配 列 上 の 異 状 も な

く 、 ま た 詞 書 の 不 当 な 点 も な く 若 干 の 欠 陥 は

あ る に し て も 最 も す ぐ れ た 善 本 と い う こ と が

あ る の で あ る 。

| | | | | | | | | | | | | |
|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|--------------------|--------------------|-------------|-----|----------|----------------------|-------------|------|---------|
| 右の文献写真で見ると通り一丁十一行。歌は | 一行書き。本書も勅撰集、その他の集に入集 | してゐる歌の上にはその入集した歌集名を書 | きこんでゐる。本写本には次の奥書をもつ。 | 散本集十卷以師翁写本書写之維時文政十 | 年晩秋下旬命重賢書写之而后再三校合了 | 至初冬望後落成以識其由 | 源 轅 | 以師翁校本一校畢 | 此本今 水戸家へ献上彼御文庫ニアリ | 文久二年三月廿八日功畢 | 間宮永好 | これによると、 |
|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|--------------------|--------------------|-------------|-----|----------|----------------------|-------------|------|---------|

(一)、源頼が師翁の蔵していた写本を以て文

政十年の秋下旬重賢に命じ書写せしめ

その後再三校訂を加え初冬に至つて成

つた本であること。

(二)、その後、間宮永好がこの本を入手しそ

の師小山田興清の校本によつて校異が

施された本であること。その校異の終

つたのは文久二年三月廿八日であつた。

という書写校異の段階の経緯をもつ。即ち、

この本はまず頼が書写し、校異の書入は頼と

永好が施している。この時の永好の書入は小

山田與清校本に拠っているのである。

小山田與清（天明三年—弘化四年・65才没）

は武蔵の人。春海に師事し四十九才水戸斉昭

に聘せられ彰考館和書局に出仕した国学者で

向宮永好（文化二年（1805）—明治五年（1872）・68才没）

はその門下。水戸の人で斉昭公に仕へ小山田

與清と共に八洲文藻を編纂した国学者である。

この師弟二人が散木集研究家であつたこと

はまた注意すべきことであつた。永好のいう

師翁校本とは興清の書入れた本であり、水戸
家に献上したものでこれは群書類従の本文を
有する散本奇歌集であつたのである。

本書第一冊見返には永好の識語がある。そ
れは次の如く複雑な校異の過程を述べている。

「墨と朱とを以て傍に書けるはもとより此

本にありける也。サと記せるは故翁本に

藍を以てものせる也。イと記せるは異本

也。△と記せるは故翁本に書名なきもの

也。ルと記せるは群書類従。墨と記せる

はルの畧本也。○と記せるは墨にて故翁

本に校せる也。但書名をあけず。□と記

せるは故翁本に墨にてイと印せる本。

これによつてみると、本書には永好が入手

する前にすでに墨と朱を以て校畧の書入れが

存していたのであり、永好は更に以上見る如

く種々な符号を用いて類別を試みてゐる。尚

その外にも「契沖本」と注した補入款の書入

れもあり、永好は興清の注記考証も写してい

るから永好本はそのまゝ
興清本の形をも残存
せしめており、その点この
一本で両本をみる
ことが出来るという便利
さを有していること
になるのである。

次に諸符号を中心に先に
貼付した文献写真
の個所の書式を具体的に
説明すれば左の通り。

(一) 墨と附したものの
(興清本に既に記入のもの)

一行目 袖に 付墨也 尽す身を し (歌)

(二) △の符号 (興清本に校異の書名なきもの)

五行目 詞書 山里にて 帥中納言 源△

| | | | | | | | | | |
|---|--|--|---|--|---|--|---|---|---|
| 「 ひと と夜。 」 の 右 に 世 々 など を 書き 込 んで いる。 | 考 考 と し て あ げ て い る。 ま た、 「 み ぶ 」 に、 全 生 | 「 貧 道 集 三 」 や 「 白 氏 文 集 」 な ど の 歌 や 詞 を | な お、 校 異 で は な い が こ の 丁 で は 上 欄 に、 | — こ れ は、 イ 本 に「 」 の あ る こ と を す で に 興 清 が 記 入 し て い る こ と を 示 す。 | 七 行 目 「 い そ あ ひ み け る セ 夕 を し 」 （ 歌 ） | (Ⅳ) 「 イ 」 の 符 号 （ 異 本 を 示 す も の ） | 二 行 目 「 み ぶ 」 に 侍 け る こ ろ 「 」 （ 詞 書 ） | (Ⅲ) 「 ○ 」 の 符 号 （ 興 清 の 墨 で 校 訂 し た も の 。但 し 書 名 は あ げ ず ） | 六 行 目 「 」 詞 書 「 」 歌 の よ ま れ け る に 「 」 を△ み△ |
|---|--|--|---|--|---|--|---|---|---|

以上の如く間宮本の校異は複雑な段階を示すもので、大方その校異は群書類従本以外の諸本との対校で（諸本の名は示していないが）あることが知られる。

水戸学を支えた師弟二人が散本集研究にかくも熱心にその校異は委細を尽しているのであるが、本文からいえば類従本系であり、間宮本は類従本・弘綱本・国歌大系本・京大本・（織部本も近いのか？）等と共通する左の如き誤謬をもっている。

(1)

詞書「ならの歌合に人にかはりて」(五月)

これは「ほととぎす鳴うれしさをついめど

もも袖には声もとまらざりけり」という「永

縁奈良房歌合に作者中納言君俊頼の孫殿

縁のこと」の名で出詠した俊頼の代作歌で

当然この詞書のあるのが正しい筈なのにこ

こにはなくて一首べだてた「今こそはふた

むら山の時鳥」の詞書に「ならの歌合に人

にかはりて」郭公不之といふ事を」と前半に

混入してゐる。「今こそは」の歌は勿論「

永縁奈良房歌合^しにはないのである。書陵

部本を始め大野本系統の諸本はかような誤

謬は冒していない。これは間宮本のみの欠

陥ではなく類従本系統の誤謬なのである。

(2)

秋部八月の左の詞書と歌とが脱落。

○詞書「曙」に度のまぢかく聞えければめづら

しさによめる^し

○あさ戸あけてたちいづる底の声きけば跡

つかひにもきたりけるかな^し

本写本に於ては上欄に「契沖本。畧本。^しと

注しこの詞書と歌とを記入している。

(3) 「わきかへりなみぢへさそふたきつせにた

へてもたてゐはまくらかな」(雑部上)

右の歌脱落。但しこの歌の詞書「をとほに

まかりて瀧のもとにて人々かはらけ取て歌

よみけるによめる人のもとに数多居なみて

夜更ぬるよしをよめる」のみは存している。

(この歌は書陵部本・小沢本・烏丸本・大野本・三

手本等にはある。)

(4) 連歌 「法橋なりける人のこの比人にいはる

、事有けるをたはふれて、隆淳阿闍梨^し

まではあるが肝心な隆淳の句（前句）

○まことにやのりのはしよりおちにける

が脱落。（書陵部本・大野本・小沢本・三手本・烏丸本^{には}ある）

以上が間宮本を含めた類従本系統の脱落個

所である。次に間宮本のみの脱落をあげると

左の歌一首（詞書を含む）のみである。

○ 「又田に鹿のなくを聞てよめる

秋の田のあぜふみしだきなく鹿はいなむし

ろをやしき思ふらん

└

散木集からこの一首の脱落は他の諸本には
その例もなく間宮本の特色ということが出来
る。次にこの丁の文献写真を貼付し、その書
き込みをみてみよう。

この丁には先の(2)の諸本共通脱落と本書の
 みのこの脱落歌の二個所あり、後者を(2)より
 も更に大きく補入の形で書き加えてゐるのは
 永好が諸本を見てのことであらう。本書はその書
 写過程、本文内容から大野本系統に近い語句
 が多い。これを類従本を底本として校異を施し
 てみるとかなり多くの数を抜き出し得る。詞
 書及び諸本との共通の語句を別にして本書の
 みの校異は筆者の調査では119例(連歌4句を
 含む。但し長歌は除外)という多くの校異個

| | | | | | | | | | |
|-----|-----|----|-----|---|---|---|---|---|---|
| (2) | (1) | い | | も | の | て | た | 與 | 所 |
| 妹 | な | の | 次 | 多 | う | も | 脱 | 清 | が |
| 背 | み | で | に | く | ち | こ | 落 | 本 | あ |
| 山 | み | 主 | 119 | と | 大 | の | 、 | の | つ |
| ！ | た | な | ヶ | く | 野 | 事 | 誤 | 時 | た |
| 木 | て | も | 所 | に | 本 | は | 写 | か | 。 |
| 々 | る | の | の | 書 | 系 | 同 | も | ら | こ |
| の | 桜 | に | 校 | 陵 | 統 | じ | あ | の | れ |
| は | の | つ | 異 | 部 | の | — | る | の | ら |
| ぐ | み | い | 全 | 本 | 諸 | こ | と | の | の |
| ゝ | か | て | 部 | と | 本 | の | 思 | も | 款 |
| む | は | の | を | 似 | 一 | あ | わ | あ | の |
| 花 | 池 | み | 例 | て | 致 | る | れ | る | み |
| を | に | あ | 示 | い | し | 。 | る | し | の |
| こ | さ | げ | す | る | て | (| (| 、 | の |
| そ | へ | て | る | 全 | い | 詞 | 詞 | 永 | 校 |
| み | — | お | 白 | も | る | 書 | に | 好 | 異 |
| れ | 二 | き | な | い | も | つ | つ | の | は |
| (| 月 | たい | | | の | い | い | 冒 | す |
| 全 |) | | | | | | | し | で |
|) | | | | | | | | | に |

| | | | | | | | | | |
|-----|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| (8) | (7) | | (6) | | (5) | | (4) | | (3) |
| も | 山 | も | 紫 | れ | 卯 | 有 | い | 咲 | 今 |
| が | 里 | お | の | ぬ | 花 | と | と | け | 年 |
| り | の | な | 廣 | 物 | は | や | し | ば | よ |
| 舟 | こ | じ | に | に | い | 鳥 | く | ち | り |
| お | や | 梢 | あ | ぞ | は | の | を | ー | ー |
| と | の | ぞ | ま | 有 | っ | 鳴 | の | 心 | 花 |
| す | え | に | や | け | は | ら | あ | し | の |
| う | び | え | ど | る | こ | む | あ | づ | ゆ |
| 船 | ら | む | り | (| す | (| り | か | かり |
| の | に | (| せ | 四 | 浪 | 三 | か | に | に |
| み | も | 五 | よ | 月 | に | 月 | へ | よ | と |
| な | る |) | 郭 |) | か | (| や | を | は |
| れ | 月 | | 公 | | ほ | 次 | る | す | る |
| ざ | の | | か | | れ | 郎 | 稲 | ぐ | と |
| ほ | ー | | か | | と | 百 | を | さ | 思 |
| さ | (| | よ | | も | 首 | こ | ば | へ |
| し | 六 | | ふ | | お |) | い | や | ば |
| て | 月 | | か | | あ | | に | (| 全 |
| も |) | | き | | る | | 穴 | 全 |) |
| い | | | ね | | て | | エ | | |
| か | い | | | | は | | に | | |
| か | か | | | | ぬ | | | | |

に^デはやきなるらん

(六月)

(9)

ころもうつゝことぞ^ナともなくぬる袖かな(八月)

(10)

紫の御^{さか}かりはゆゝしましるなるくちのはが

ひに雪散ばひて(十一月)(次郎百首)

(11)

いつは^{書・大・三・神甲乙・岸・小・昌・高の各諸本も}より^{たしめ}のちかひなうね^は君が代をおほた

らし^{たしめ}めに任せてぞみる(神祇)

(12)

古を思へばくやししめのうち^{ナレ}にさかさす

まは^{あり}おかまし物を(令)

(13)

あたりをばなをほのめ^{ナレ}かせ神がきや(令)

(14)

雲井にてかみなき人のし^しな^しらば(親教)

(15)

たぐひなりえのうちにおおさままりりて教の外に

やもれんとすらん（秋教）

(16)

いりがたき人も……のぞむ光ぞさはらはりざりける（全）

(17)

思ふには空をなどもどかとはとざらんみだの光ぞ（全）

(18)

めづらしくたてし誓ひの……ひきゐてきませけの絶ぬまに（全）

(19)

いささめにあはれと見ませさせときまつと……（全）

(20)

かつしかのわさ田のをしねをこきたれて……（全）

(21)

したひくる恵のやつこの旅にても身のくくせま

なれや夕暮きは

（恋部上）（千載集入）

(22)

日くるれば^は思ひも^しあへぬ我恋やなるとの浦

にみ^はつし

ほのをと

(全)

(23)

せきもあへぬ^{こと}涙の川は早けれど身のうちき草

は流れざりけり

(雑部)

(24)

なき影にかけ^{だに}るたちも有物をさやつかの

まに忘れはてける

(全)

(25)

いかにせん^いいづち^{のち}ゆけども世の中の^夢……(全)

(26)

よの中を恨みてすぐるたかせ舟声うちそへ

てからるをす也

(全)

(27)

……

| | | | | | | | | | |
|--|---|--|---|---|---|---|---|---|--|
| 以上 119 個所 から しほ つて ここ に 例示 した 32 | (32) みち す お ら ま も り さ い は い た ま ふ れ は (連歌附句) | (31) 谷川 の 心 ほ そ さ に か き た え て (連歌附句) たとふれば | (30) 朝 い で に き ぶ の 豊 み き の み か へ し --- (全) | る 物 に ぞ 有 け る --- (全) | (29) 何 事 も 思 ひ い た ら ぬ 世 の 中 に 身 は あ ま り ぬ | は い つ か た ゆ べ き (全) | (28) み 狩 す る い ぬ だ に か け じ せ こ な は や 思 ふ 心 | は た い ひ た す ら に (全) | (27) 我 心 千 々 八 千 種 に お も へ ど も な り は つ る み サ ツ る |
|--|---|--|---|---|---|---|---|---|--|

例の持つ意味はすべて脱字或いは誤謬と筆者
の判断した校異であるといふことである。こ
れによつて知り得ることとは本文的には丹念な
書写過程を経て類従本系統本とも異なつたも
のを有しているのであるが、局部的にはかな
りの語写が多かつたといふ結論に達する。こ
れが間宮本もつ欠陥であつた。

(11) 静嘉堂文庫蔵「散木奇歌集」(一冊本)

本写本は、同じく静嘉堂所蔵本で「奇」の

字を用いてゐる。一丁十ニ行。歌は一行書き。

但し雑部ニ巻のみの一冊本である。本文の終

りに「在江戸中一覽之次手以他本聊令校合是

役名を正し侍る(侍るの字不鮮明)季鷹」と

あり、さらにその後には、

「天保九年十月八日写之了判

借乞源黄門

(小書辛)
建通卿

本令書写校合

天保十年二月上旬左中并

の光
印政

同月一見付紫同年十一月一覽

弘化四年冬一覽

嘉永元年夏凌暑熱一覽

と奥書はつづいてゐる。これによつて知られ

ること、まず上賀茂祠官加茂季鷹(宝曆二

年—天保十二年90^才没)が江戸在住中に校合を

なし、その本を久我建通が借りてさらにこれ

を校合し、天保十年鳥丸光政がまた書写した

という過程を経た本である。但し何本を以て
 校合したかについては明記していない。ただ
 本文からみて連歌の部に、
 ○まことにやのりのはしよりおちにける
 の一句を有しているところから大野本系統に
 属することゝ明らかになつてくる。(この句類
 従本には脱落)しかし、本文の字句には誤謬
 も多く、雑部ニ巻のみでもあり本文資料とし
 ては価値が乏しい。これが烏丸本の実態であ
 る。従つて本文校異は省略した。

(12) 刈谷図書館蔵「散木棄歌集」(十卷三冊)

本写本(次の頁の文献写真参照のこと)の本
文は一丁十行書き。歌は一首一行書きである。

本写本とすでに刊本の項で述べた村上忠順
の「散木弃歌集標注」とは密接不離の深い関
係を有している。そのことについて若干述べ

ておこう。

まず、本書の構成についてみるに(一)「
於富

| | | | | | | |
|--------------------------------|---------------------|-----|------------|--------|---------|----|
| (二)、 刊本「散木奇歌集標注」にも忠順の自序がある。 | の如くであるが、内容には全く関係ない。 | (D) | (C) | (B) | (A) | |
| | | 忠順 | いとまのひまのなれば | 校訂せし本を | 校へ正さむの心 | 刊本 |
| | | 忠万左 | いとまのひましなれば | 校正せし本を | 校へ訂さむの心 | 写本 |
| | | 全 | 四丁ウ末行 | 四丁オ第一行 | 三丁ウ末行 | 場所 |

舞泥^ル（刊本では舞^ルが無^クになってい^る）が附され
 てい^る。「於富舞泥^ル」の本文につ^いては刊本と
 殆ど同^じ。小異を示すと、

り本写本にもあるが、この自序の内容にはか
りりの相違が見られる。その相違の原因は何
か。それは三冊束の本写本の序が初稿である
からで、この初稿を忠順は同じ刈谷の志士松
本奎堂に批正を求めてようやく刊本の序が完
成されたのである。この経緯については刊本
の項に記述述べたのでここではくり返さない。
本写本の自序が刊本のそれと相違している
のは当然なことで、そのことは忠順の散本集
研究の過程を示すものに外ならぬ。

かくしてこの三冊本の本写本が刊本「散本
 弁歌集標注」の原稿本となつたのであり、こ
 こに本写本の位相がある。
 とところで本写本の校訂のことについて本
 文の終りに「群書類従二百五十四巻奥書、右
 散木奇譚集以織部正乗尹本校合了」という識
 語がある。これは至つて簡単な識語であるが
 本写本の校合についてはずでに刊本のところ
 で述べた通り「於富舞泥」の中に校倉所蔵の
 古本も底本として校訂した本を入手し、類従

以上の校異が十卷全卷にわたつて施こされ
 ているのである。しかも上欄には歌についで
 の解釈、考証が所狭きまでに書き込まれてお
 り、刊本また同じ。(その原稿が本写本であ
 るから)。校異は凡そ大野本系統の諸本からのも
 のであるが、ここに注意すべきことは、築瀬
 一雄氏によつて忠順が散本集の本文校訂に使
 用した本が、同じく刈谷図書館に現蔵されて
 いる四冊本の「散本并歌集」であることとを調
 査報告されたことである。(『国史と国文学』昭和四十年八月号)

筆者も刈谷図書館を探訪し調査したのであるが、簗頼氏の学恩を有難く思っている次第でこの事について若干述べておこう。

(13) 刈谷図書館蔵「散本章歌集」(十卷四冊)

本写本も本文一丁十行書き。歌は一行書き。

(文献写真参照) 字体は三冊本よりも流暢である。

さて、本写本の特色としては、校訂に關する奥書が四冊の各冊ごと、その末に朱書で書さ込んでいることである。その筆は葉山信果である。次にそれを示す。

(第一冊)

以古鈔本

稱一本
者是也

及塙氏群書類従本

稱塙本
者是也

校勘了

天保二年仲秋

況齋

岡本保孝

同十二年晩春

篤齋

葉山信果

(第二冊)

天保十二年晩春校合了

信果

(第三冊)

以古本塙本校

此本欠卷九以下今以古本補之附于後

此原本及古本並校齋將谷先生所藏

天保二年仲秋

岡本保孝

天保十二年晚春

葉山信果

(第四冊)

以塙本校了

塙本卷末云

右散本奇譌集以織部正乘尹本校合了

なお、本写本の第四冊目の末尾に奥書があり、その本文は刊本と全く同じ。(この事についてはずでに(一)刊本の(3)に文献写真を貼付し説明しておいた。)

さらに忠順は、その奥に本写本の校合の経緯について書き込みにしている。(写真其の五)
(これについては後述する。)

また続いて本書の奥書には

「天保十二年晩春写之 篤齋 葉山信果」

の識語があり、いかに信果が散木集本文校訂

に力を尽したかという資料にもなるのであるが、忠順が刊本に奥書を写すに当たっては信果の校訂したこの天保十二年の年記を全部削除してしまっている。これは学者忠順として決して当を得た処置とは言えない。忠順は信果の業績をもつと評価して正しく位置づけねばならなかったのである。次に信果の奥書を貼付する。(文献写真其の四)

さて、四冊本の写本校訂の過程について、各冊末の奥書と保孝、信果の識語等により明らかでこれを整理すると凡そ次の如くなる。

(一) 岡本保孝（寛政九年（1797）—明治十一年（1878））

82才没。）がその師極斎所蔵本を写した

が、これは第一巻から第八巻までの本

文であつた。

(二) さらに第九巻と第十巻とは同じく極斎

所持の別本で補訂した。これは（一）（二）

天保二年仲秋のことである。

(三)、葉山信果は、保孝の写本を写し、第九

巻以下は同じく校勘別本と群書類従本

で十巻全巻を校訂した。これは天保十

二年の晩春のことであつた。

岡本保孝は校勘の漢学の方の門下であり、

散木集研究について師の学恩を非常に蒙つて

おり、保孝はこの事を識語の中で、

「嗚呼徳崇学富儲書亦称焉。保孝生平浴

於先生之徳沢有年於兹子孫其勿忘諸し。

と校勘を賛仰、報恩の情を捧げてゐる。しか

しまた一方信果の業績も決して忘れてはなら

ない。

散木集本文研究はかくして

校斎

↓保

孝

↓

信果

↓

忠順

と

発展する。

と

と

と

と

と

と

こ

ろ

で、

刊

本

の

項

で

す

で

に

述

べ

た

如

く

忠

順

は

「

於

富

無

泥

し

の

中

に

於

て

(一)

、

校

斎

所

蔵

の

古

本

を

も

と

し

て

校

訂

し

た

本

の

入

手

の

こ

と

。

(二)

、

類

従

本

そ

の

他

二

三

本

を

以

て

校

合

し

た

こ

と

。

(三)

、

野

口

道

直

所

蔵

本

と

校

合

し

た

こ

と

。

な

ど

と

記

し

て

い

る。

こ

の

中

類

従

本

そ

の

他

二

三

本

が

い

か

な

る

本

で

あ

る

か

は

刈

谷

図

書

館

に

も

散

木

集

の

| | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-------------------------------|---|----|----------------|-----|----|---|
| 似 | ク | 百 | 衛 | 野 | 「 | き | い | い | 別 |
| タ | 書 | 年 | 以 ^比 書 ^入 | 口 | 嘉 | 入 | 由 | 本 | 本 |
| レ | モ | 前 | 藍 ^レ 野 | 道 | 永 | れ | で | は | は |
| ド | カ | ノ | 口 | 直 | 四 | て | あ | 四 | 見 |
| 今 | レ | モ | 本 | 本 | 年 | あ | る | 冊 | 出 |
| サ | リ | ト | 四 | 校 | 辛 | る | か | 本 | せ |
| シ | 。 顕 | ミ | 季 | 合 | 亥 | 。 | ら | の | な |
| 後 | 昭 | ユ | 部 | 了 | 四 | （ | 不 | 末 | か |
| ナル | 注 | 。 祝 | 帛 | 道 | 月 | 文 | 明 | に | つ |
| ベ | 一 | 部 | モ | 直 | 十 | 献 | で | 忠 | た |
| シ | 卷 | 以 | 書 | 通 | 二 | 字 | あ | 順 | し |
| 。 書 | ハ | 下 | モ | 称 | 日 | 真 | る | は | 、 |
| モ | 帛 | ハ | 一 | 青 | 尾 | 其 ^五 | 。 次 | 墨 | ま |
| 別 | 四 | 氏 | 様 | 物 | 張 | ） | の | で | た |
| 人 | 季 | 新 | = | 問 | 国 | | 野 | 次 | 村 |
| = | 部 | シ | シ | 屋 | 琵琶 | | 口 | の | 上 |
| | = | | テ | 市 | 島 | | 本 | よう | 家 |
| | | | | 兵 | | | につ | に | も |
| | | | | | | | 書 | な | な |

シテイタク方レリ。終ニ文禄三年四月廿

七日写之。題昭親筆之本也。○寛文十歳

庚戌卯月十日書写我足軒トアリ。文録三

(禄)の謄写

年ヨリ今茲嘉永四年マデ二百五十七年〇

寛文庚戌ヨリ嘉永庚戌マデ百八十一年也。

これによると、忠順は葉山信果写本を入手

（村上家の「蔵書目録」によると嘉永元年の購

入の由―葉瀬一雄氏調査による）した後に道

直所蔵本を以て嘉永四年校合してゐるのであ

る。（これは題昭親筆本で^(写本)我足軒なる者寛文十年に書写したもの。）

| | | | | | | | | | |
|----------------------|---------------|----------------|------------------------|------------------|---------------------|----------------------|----------------------|----------------------|------------------------|
| この野口本はいかなる本文を持つていたか。 | この事について考えと類従本 | にない次の歌と連歌とがある。 | (一)、あきかへりなこちへさそふたきつせにた | えてもたてる岩まくらかな(雑上) | この一首については信果の写では歌がなく | 一行あけて朱筆で「塙本ニモ空行アリ」と注 | していろが、忠順は藍を以て補入。刊本にも | 「諸本詞書のみありて歌脱たりいま野口本に | よりにて補へり」と注して補入してゐる。(類従 |
|----------------------|---------------|----------------|------------------------|------------------|---------------------|----------------------|----------------------|----------------------|------------------------|

| | | | | | | | | |
|-------|--|--|--|---|---|-------------|--|--|
| また同じ。 | ミ 存 セ ル ヲ 補 へ り し と 欄 外 に 朱 で 記 入 。 刊 本 | 「 此 一 句 諸 本 ＝ ミ 十 腕 タ リ ヒ ト リ 野 口 本 ＝ ノ | 亦 一 行 空 欠 し と 朱 筆 で 注 し て い る が 、 忠 順 は | こ の 一 句 に つ い て も 、 信 果 の 写 で は 「 塙 本 | (二) 、 ま こ と に や の り の は し よ り お ち に け る | あ り 。 | 人 々 か は ら け 取 て 歎 よ み け る に よ め る し の み | 本 に は 詞 書 「 お と は に ま か り て 滝 の も と に て |
|-------|--|--|--|---|---|-------------|--|--|

次に野口本にも脱落款があり、その例は左

の通り。(詞書も欠脱)

(三)、難思光仏

人はいさ光のすぢをしるぞともおなじ仏や

しうばしらるゝ (釈教)

右の欠脱について忠順は、四冊本には款の

肩に「ノ口本无」と藍墨で記し、下に墨で「

釈教ニナレ」と注している。三冊本に於ては

「一本无釈教題共闕」とまとめ書いてある。

この款と詞書の欠脱しているのは神宮乙本

・小沢本・岸本本等で、歌のみ欠けているの
 は神宮甲本・昌平坂本で、いずれも類従本系
 以外の諸本である。この事は(一)・(二)の場合に
 ついても同じ。(一)・(二)の歌の存しているのは
 類従本以外の書陵部本・小沢本・鳥丸本・大
 野本・三手本等の諸本である。野口本も大野
 本系統に属することだがこれによつて明らかに
 なつてくる。
 類従本とそれ以外の多くの諸本との相違点
 は、散木集の作品、詞書の脱落の有無により

区別される。例えはその一つに次の

朝あさ 曙あけぼのに鹿のまぢかく聞えければ

めづらしきによめる

○朝戸あけて立いづる鹿の声きけば跡つかひ

にもきたりけるかな（八月）

の詞書しと歌うたとが類従本では脱落している。

ところが書陵部本・神宮文庫甲乙本・大野本

・三手本・昌平坂本・尚舎本・岸本本・小沢

本の各諸本には凡て存している。四冊本で原

本と言われている掖斎所蔵本にもこの一首が

ある。それに巻第九雑部以下を欠脱しているから神宮文庫所蔵本に近い本文を持つものといえるであろう。

忠順は葉山信果の写本をみて信果の群書類従校合のみでは満足せず自らも墨を以て校異

を施している。(信果の校合は朱) また保孝、

信果の加えている歌の他集への肩附なども増

筆追加をなしている。この段階を四冊本でみ

ると、

保孝(勅撰集のみの集附)(墨書) ↓ 信果(勅

撰十百首（堀河百首・堀河後度百首）・万代集）・（朱書）——↓忠順
 （更にこれらの上に私撰集・類題集・その他
 の歌書との關係を追加、整理をなす。）というよ
 うに展開するのである。三冊本「散木奇譚集
 標注序」^L（松本奎堂に批正を乞うた時の初稿）
 の中に
 「取其歌載在撰集及諸書者校讐之以錄異同」^L
 と記しているのは此の間の経緯を物語るもの
 である。次に四冊本から三冊本への校合の移行状態を左
 の二丁（文献写真）により關係の個所をみてみよう。

以上僅か一丁分りの例であり、丁によつて勿論校合の多寡はあるが、（本丁は複雑）要するに三冊本は四冊本を本文校訂用の資料として用い、保孝・信果の校異を検討しつゝ、校番本の一本（古鈔本）類従本に近い本文を中心に校合を進めて漸次上欄の注も増加しつゝ、やがて刊本、散本、歌集、標注の素地を形成していった。尚、刊本成立までに忠順は熊代繁里（本國）、橘冬照（江戸）等に三冊本の稿を送り意見を乞うた。二人の解答書は同じく刈谷園

書館蔵「蓬廬雜鈔」第二十九冊に所收。この
事については築瀬一雄氏編「碧冲洞叢書」第
五十七輯「詞花集解」(熊代繁里著)の附録
として繁里・冬照の「散本集考」二部が翻刻
されている。これは忠順の質向に府しての二
人の散本集歌の解釈、考証であつた。これら
は忠順の標注本に一部とりあげている。(但し、僅
か)以上の経過をたどり忠順は広く問題点があ
れば人を求め批正を乞ひ、「散本弁歌集標注」
を完成したのである。

以上主要な「散木集」の写本について述べ
てきたがこの外にも本集の写本は甚だ多い。
これら多くの写本については筆者も目下調
査中で細部にわたっては今後とも研究を継続
せねばならないが、その写本と所蔵者とを左
にあげておく。

(一)、散木和歌集(一冊)：(二)、散木奇歌集(三冊)

以上二種類は共に遠賀文庫所蔵。

(三) 散木奇歌集(二冊)・(四)、散木奇歌集(一冊)

以上二本は共に石川県立図書館蔵。

(五) 散木奇歌集(九冊) (六) 散木奇歌集(三冊)

以上二書共に京都大学所蔵

(七) 散木奇歌集(三冊) (八) 全名(三冊)

以上二書共に竜門文庫所蔵

(九) 散木奇歌集(三冊) (竹柏園所蔵) (佐々木弘綱翁書写)

(十) 散木奇歌集(二冊) (阿波国文庫旧蔵・関根慶子氏蔵)

(十一) 俊賴集(二冊) (渋谷虎雄氏蔵)

(十二) 散木和歌集(八冊) (樋口芳林氏蔵)

(十三) 俊賴朝臣詠歌鈔(二冊) (彰考館蔵)

(十四) 散木集(二冊) (松野陽一氏蔵)

この外管見に入らない諸本もまだあるだろう。今後の研究に志したい。

諸本の校異などを試みつつ考えたことであるが、本当は俊賴自身の原款はただ一つの形であつた筈であるのに校訂、校異などを通してみるとこれまで評述してきた通り諸本により款そのものはもとより、詞書も甚だしく異なつていく多くの場に遭遇してきた。俊賴の款を考へる後人達が思わぬさかしらで本文を誤写したこともあるう。これら写本、校合な

どはもとより後からの人達の間で起つたこと
で作者俊頼には全く分かり知らぬことであつ
た。それでは俊頼の作つたものとうたはその中
のどれであつたのか。この完明こそが俊頼の
歌に本当に近づくことであり、本文研究を中
心に、しかもよりよき善本を基底として彼自
身のものと、の姿をみつけ出すことが、歌人俊頼の
本当の研究でなければならぬ。本文研究と同
時に歌人俊頼という文学の世果に回歸して彼
の一首々々の作品を大印に考えねばならぬのである。